

溪稜



No 16

浦和溪稜山岳会会報

溪 稜

オ 16 号

もう何處にも高じどころはなくなつた。こゝは少し平らな地面だ。一歩二歩跳べば、どうりへ何うて跳んでや斜面は落ち込んではいる。午後の二時だった。しかも僕は自分の気絶の布団とあつた場所に、兎殊が生まれてからこの方初めてのに向として仰さんでいるのだ！ だのに心酔わせる幸福感は一つも湧いて来ない。歎息を挿げて嘆息の声も感じられないし、勝利者のいたく功の感激など情も覚えられなかつた。この胸向のもの意義というものは少しも僕の實感に上つてこなかつたのだ。僕はもう完全に参つてしまつた！ ぐだぐだに疲れ切つて雪の上に身を投げた。まるで前もって準備でもしておいたように、僕はたゞ全く自動的にヒツケルを風に吹き固められた雪に吹き差す。こゝまで十七時間、たゞさき秋口なのだ。一歩くが解いにはかなうなかつた。それは言語に表する意志の空虚努力だつた。
僕はもう立つなどできよくなり、もうこれ以上先の道を考えなくてよくなつたので、たゞ逃しかつた。

ヘルマン・フール ヘリテムの上と下
アンカ・バルバット



溪棱才16号 目次

卷頭言

八ヶ岳と河原沢奥壁オーレンゼー小同心峰正面フランク
積雪期八ヶ岳と河原奥壁オーレンゼー取扱の記録—

菅野達也

谷川岳一ノ倉沢四ルンゼー或る獲難の記録—

牧野泰雄

谷川岳二ノ倉沢三ルンゼー

奥園英治

谷川岳一ノ倉沢四ルンゼー

園田英男

谷川岳タカノスド沢

山崎定男

ジダンタルムの壁

正面フエイス・Tフランク

T下フエイス・T北壁

梯高ひとり歩き 明神東壁(前壁北尾根)西壁

梯高屏風岩中央刀ソテ・インゴルルート

三月の東幹岳

冬山台宿 南アルプス 銀岳

二子山南面——前人のためのグレンテ案内——

生と死の谷向——谷川岳断章——

苗吹川東沢(雁坂峠)

会員報告
会員名簿
40年度山行一覧表

34 35 36

会計報告
編集後記

37 38

清水英男	31	28	26	22	21 18 16	12	11 9 8 6	4 2
过 坂 奥 山 奥 山 崎 満 水 水	37 38	23	24	25	26	27	28	29
水 奥 园 奥 园 定 英 男 男	37 38	23	24	25	26	27	28	29

山と自分のものに

年月の過ぎるのも早いもので、昭和31年12月に会が発足して以来、今で10年になる。これまで大きな事故もなく活動を続けてこられたことは会員皆氏の梗概な行動と、協力のたまものであろう。しかし、昭和40年度の会の運営、山行面をふり返ってみると、まだまだ充份でないよう思われる。

会の成長には、会を構成している会員の成長が必要である。ひとつは聖験が、次の段階への基礎になり、毎回の山行に目的を覺出し、物語の聖験から知識、技術を吸収していく。で、ようやく山行を重ねていきたいものである。残念ながら「他人のいく所へついていく、会で計画した山行にただ参加する」者が多いのが実状ではないだろうか。自分が頭で考へ、自分で調べ、研究し、自分の目でたしかめてこそ、その山行による聖験が生かされて、次の段階への基礎になるのではないかと思われる。

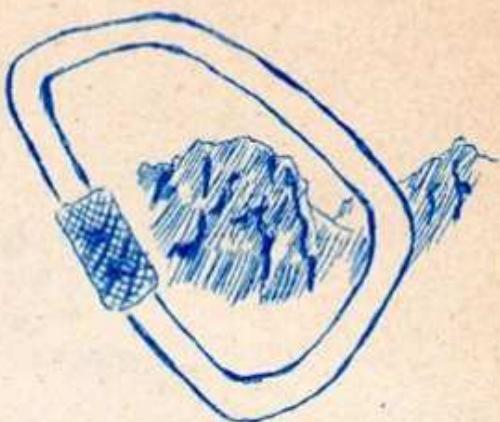
また、われわれには上の年代の人達から受け継いだ知識、技術、聖験を次の年代に引き継ぐ義務があろう。と同時に自己も進歩しなければならない。世には過去があると同時に未来がなくてはならない。今回の山行がすべて新しい知識、聖験となり、積極的に山行を重ねている会員にとっては、達成目標を含めて会活動に、時には自己の目的に相反するものを感じることもあるだろう。それは会という一つの組織に入り活動する以上、一度はつき当らねばならない問題である。各自で真剣に考えてみようではないか。

——菅野達也——



広河原沢奥壁才2ルンビ 小同心峰・正面クラック

(八ヶ岳)



抜野要類

朝日
メンバー

39.9.12(木) 13
奥圓善輝・坂野善雄

オ一日(広河原沢2ルンビ)
美濃戸への広い道と分れて、中
央経路への小道に入り、美濃戸か
らの堤を渡ると広々とした野原へ
出る。この辺は静寂そのものだ。
これにもう秋の匂はしきが感じさせ

る。おこうにスッキリした木が出てはじ
めている。実に力と力で、こ
れから緊張する覚悟をするこ
とがあつくくなる。一のの
どかさもハサハサのアラシク
路とあわざると、一突して殺
伐とした赤い山肌をじきに出し
にして伐跡を見るようになる。

広いトランク路も広河原沢
本を使用して登つたが、見掛けよ
り悪かった。上段のルートは二本
あり、左壁のクラックを登つて落
口にトラバースするルートと、正
面のすぐ左のクラックルートがあ
る。われくは仮想を登つたが、
出口がかぶつてしまいわるく
岩壁がかかるから人口まで10

ほどの滝がある。すべて直進しよ
うと思つたが、エアが濡れてしまう
から左岸の岩壁を利用したら、非
常に高くすいとして次に登けられ
た。洞窟口はまだ未開拓された。
左の洞窟口にて豪食。2ルンビ
クラックにじよく取りかかる。ま
ず2ルンビと2ルンビにかかるジ
マソクション・ホールは無雪期
には直進は不可能のため、うるそ
せにヘリドーの口縫にある左上り
の車内バンドをぬつて、2ルンビ
との中間リツンを取る2ルンビに
下る。2ルンビをヨシマソクション
の落口より赤黒いナメ渕となつて
奥壁へせり上つている。

2ルンビでは細い流れを持つ急
な傾斜のスラブが大滝の下まで続
いている。途中、石手から下でな
じみとよつて左壁2ルンビに入る
・同類の大滝は一段20メートルで、下段
は赤いスラブで左手をハーベン一
にした伐跡を見るようになる。

用した。かなりのバランスを保
つと進つたが、エアが濡れてしまう
ことある。アフミを使用した方が良
いと思つ。また、クラックの出口
付近は出口が多く必要になる。
大滝りすぐ上で5メートルのオ
ーバーハンプの走にぶつかる。こ
の走は登れないのと、左の車内付
いた浅いルンビを登り、中間カリ
ツナを一本越えてニルンビに入る。
豪華用具をサックにしまい、カ
ンジリと焼糸のあらツメを車内
の花を楽ししながら登る。ひよ
うりと摩利支天よりカコルに出
た。阿弥陀の山頂は丁ぐ眺めただ
けである。

山頂での静かな時をすごした後
、行者小屋へ駆け下る。タダの泊
り場は広い岩場小屋(柳川南沢の左
岸、行者小屋の上流約二十五メートルの
所)に提供してくれる。

オ二日

(小同心峰正面クラック)

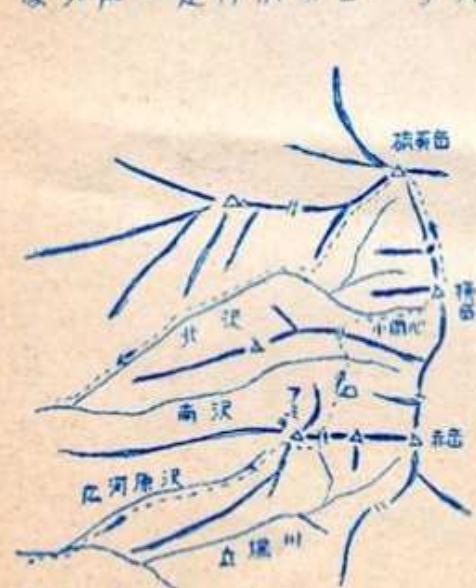
まさに腰からめて赤い岩小屋が
左岸にわたるが、左隣の岩場
に登る。ここより滝に入り右側の
岩壁に腰からめて赤い岩小屋が
見え、そこから正面の岩壁に腰から
めて赤い岩小屋が見える。また壁が遙
かに遠く、岩壁が遠く見える。また壁が遙
かに遠く、岩壁が遠く見える。

ばかり流れていって流木がつぶす
なり、きたらしき感じがする。
石に落石ヘルンセを分けるあたり
かく傾斜を増し、小同心ラフと
分れる付近から典型的なヘルンセに
なる。下用意に細い透石が色々
な形の方で、遙か下方に見えて
いた。

（用意）
「用意は、さすがボクの溪
もあれば、両岸に並んで口壁は
に、奥ではみがかわに累じラフ
である。食り出してみると、思つ
たより多く、左岸のドロ壁が残
るハーフン二本の使用。それ以上は
スベリ口のようなどうぞ」早朝
の冷れの中のぎわめて小さい
ホールドで、ひつて遙か上つた。
口十本いづほりとするて山澗
は二本ほど立ち上り終る。こゝか
らは流れも済んで、小同心ラフか
れとなつてナムニーに進むる。
ナムニー下の攀行を登つて小同
に後に立つと、ものすこじ月にあ
あられる。今まで決いヘルンセが中
り寒いので、中食もそこへに小
同心峰の草亭にかかる。
基部の石側から取り内き、左上
にトライバースしてリングを取え

フックに入る。クラック内の古
いハーフンでロレー（一ピック20
木）、トップ交代でクラックを
直上する。二木ぐらの筋が小さ
い吹吸なので、クラックの外カス
タンスを利用して乗り越す。肯定
の向かうは、はるか下に谷間が見
えたが、斧分が敷け。

（用意）
「あともクラックをつけて馬力筋
がカリツナに立つ。これが上からは
クラックは石に折れ、正面は小さ
なフェースになつていて。通常ル
ートは石のクラックだが、フェー
スを少し登り、丘手の小さなクラ
ックにルートをとつてみる。技术
でクラックは狭くなり体が入らない
いので、左手に突き出た方に足さ
ついて上に出る。こゝでサイルが
いっぽりになり、ハーフンをリス
カない壁に飛躍に打込みビレーテ
る。（二二七ナル木）



（コーススタイル）
あまり面倒な計算だったので二
人共渠底にとられる。橋出への途
中に白と上けるのに恰好の岩六ド
アつたので、休憩してサイルを離
く。
走カラや紙面にこられたカレを
登つて着いた横瀬山頂や強風に追
いたり、そろそろに大タルミ
小屋に下る。時向が早いので休ス

（コーススタイル）
オニ日 ハケ岳農場（七・一〇）—
立河原沢（八・〇〇）— 芝原山
谷（九・〇〇）— ルモゼ入口、
十一・〇〇（十一・三五）— 頭野
蛇岳道上（十四・二〇）— 岩小
屋（十五・〇〇）

オニ日 若木屋（四・三〇）—
立河原沢（八・〇〇）— 小屋
門通室（七・五〇）— 一五）—
小同心丸の屋（九・五〇）

一 横岳（九・四五）
一大タルミ小屋（
十・〇〇—十・二〇）
一 立河原沢（十五・〇〇）
一 横岳（十一・三〇）—
美濃戸（十三・三五）
十二・五五）— ハチ
田農場（十四・〇〇）

（コーススタイル）
列に下ることも考えたが長いバス
の便がないので、完璧に下ることに
する。道はよつにして立河原沢を起
点。根株はなれてシヨーゴ派新
道に入ると、日は暖かさうに近く
なり、ゆっくろと農場へと向う。

八ヶ岳広河原奥壁オニルンビ

取扱の記録



期日 40.2.6~8

Mem 奴野義雄
奥園義輝

奥園義輝

一月六日
濡れられたオーハー・シコーズ、スボ
ンは朝から明田の口動子定
さしたてかる。

今日、東海から出たことた
予想もしていなかつた家にラツセ
ルに行程は運々としてほかどうす

タ向ふ迫る源やつとの岩小屋
にうげぬじと云ふ感か秀え

予定の中山葉根は格外で、目的
のニルンビ登攀も、実現の可能性
を第(ひづ)に思える。

昨年九月の登攀を小こ返つて、

こんなはずで出なかつたがといろ
いろ考えては見るが、こうでどう
費むるねつてみたところ、東海か
急波するわけでもない。でも、せ

めてニルンビの大差を明田中に取
ることができるに、中山葉根は
カットしても、東海の先端である
広河原奥壁オニルンビは九分と

あり成功するものと考え、明日の
行動に全力を尽すことにする。

四時頃から降り出した雪は風を
伴ない、僕等のつけたトレースを
消していく。せめて明日一歩を走
いから良い天気をあつてくねる
よう願つて、十時頃に岩小屋に
エルトを落してモリ空ひ、

一月七日

冷え込みが厳しく、夜中身体を
モソ／＼させていたが、けつこう
寝ていたらし、早く起きて出発

するつもりが、ランセルを始めた
時はラフハ時を過ぎてしまつてい
て、残ながり自分のカノンヒリで可
能にあされかえつてしまつた。

燕巣湖に出でて、小さな滝は垂
の下に埋もれていて、いくつか段
になつているにすぎない。それ
だけにラツセルは深く、時には胸

までもくつてしまふ程の雪蓋であ
る。一時向かひても、ヒバーグし
た島小屋ほしく自の下にあつて、
いつこゝに進んでいる所ではない
。二丈立に空舟になつてラツセ
ルをくり返す。奴野君は体の順序
が悪くあまり費用があがりない、

僕も二週間前のスキーの於様がま
だ泊りきつて、腰の中に足を保込
で度に腰で使うことわびたゞしげ

七、八木ほどの木棒が現われる
が、ワカン呑口をまたひつアル

で、刀ツテンスを立り切る。水の
上に五のセンチほど雪が食い付け
ていて、下の木を頭に立てるが大
要である。この木を立つて五の木

はこうツヒルをぐるぎ、また同じ
程度の木棒があり、これは石屋か
う高塔く。

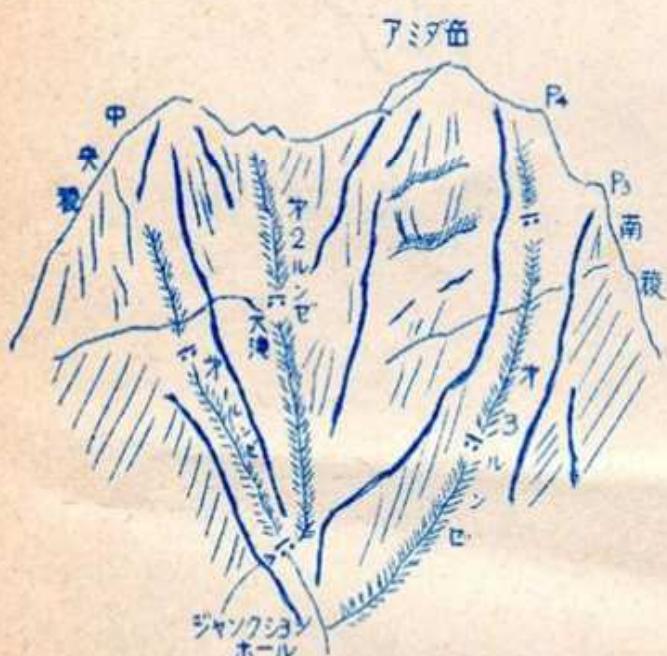
この側になると天費半減となり
くなる。誰かじバークを立つたら
しいハンタリ下で飯を食つ。いい
可憐なるんだと/orで、まだラツ
セル。すぐにナヨックストンのう
まつた巾はい滌に出会い。これに
ちよつとうり状態で口直直に飛躍
で、九月に登った時にも苦労した
處である。どちらかと高塔くと
にする。まず滌の石子から取り付
いてみると、骨肉がくつく骨身で
むすり落りる。こんなにはねの褐色
するからよつと無理である。は方
がいいかづ、また口のたどめるこ
とをする。脚壁を胸まで埋けなが
ら身がかりを渡して十メートルかさ
りで一息つけるところで、また尚
に取りに下る。骨肉がある上に風
倒木がひとく、散々苦労して滌口
より左岸二の木ほど登った側面に
ドツ刀と腰を下す。

天氣はまあ／＼良い方に向つて
けるらしい。脚は骨肉の酸で重
くつカツに立つれり行く。僕の
カツは昨日からのラツセル後で
右の方に折れてしまい、左の脚筋
同の事もなし。太野君が立つて

へる事で、僕一人で先の方をラフに走る。次にありて五の不穂アソセルをするが、また、深くない。体力の方が走りよく動かなくなり、走り方を想うふくに動かなくなってしまった。こうしてかると三ツゾウで山出合までは、白いっぽいかかりもつてある。じつたん荷を運んだところまで戻って、牧野君とこうじ登るか下るかを議論する。さうま、ラッセルをやつてジマントーションまで行ったとしても、明日一日でニルンゼを登つて飛揚まで下る事は今の調子では無理のようだ。振りに登れたとしても下山が一日でも遅れたら、飛揚が飛揚に行くに躊躇のことばがない。人達には必ずかかることになると言ふ。こゝから引返すことにする。

何を無理をすることはない。まだ未だ、での次の昇りやれる人たと自分自身に言いきかせてやる人が、なんとも説められない。空は青く澄みせたり、奥壁では盛んに雪煙をまとめて上りてしる。自的力は自の前にしながら引返す。この氣持ほなんとモ説明のしようがない。

苦勞して立つて来た滝を下る。まず衣野君に十本ほどゴホーで下



広河原沢奥壁底図

(2月7日)
岩小屋泊 8.20
F5 11.20~11.45
F6 左岸上 13.45
(引返す)
石保出合 14.43
十糸製紙飛揚跡
14.55(B)

(2月8日)
飛揚跡 7.25
南稜木脚飛揚跡
8.30~9.10
飛揚 11.07

(2月6日)
飛揚先 8.20
トラック道 9.50
広河原トランク道カ所
10.20~10.30
南稜木脚飛揚跡
12.00~12.15
左保出合 12.25~13.40
十糸製紙飛揚跡
14.17~15.10
石保出合 16.10
(引返す) 16.40
岩小屋泊

コースタイム

食って寝る

二月八日

今朝も良く冷えた。シユーチー

シコは少し濡れて、音葉うずキ音

れでテラノベリつてしる、カメラ

も、はかつき寒に終つてしまい

たので、早めに起きて今日は此處

に泊ることにする。

勢は強烈をへれた積雪期の雨

はどうちに入れたろうと、タンシ

同もする気になれば、早目に飯を

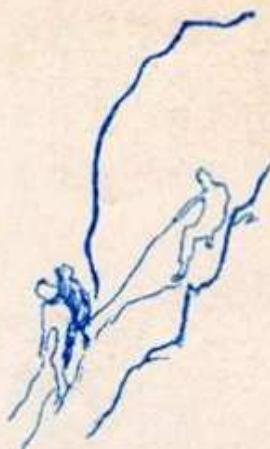
さりとて寝る時既に寝てしる。

また未だそと川に雪、日本晴

れの透野を飛揚へと走る。

或る遭難の記録

一ノ 愛次四ルンヒ



清水英男

くら入連がいた三人三枚の考えが効いたと思つた。相談の結果、天狗の悪さよりも三入り乗客の方に強ぐ値ることになった。テールリッヂからエボシスラスへ行く向は二人につけて行けず連れ気味で、いつもより体は不調だった。名石が多く、エボシスラスに大部落へ入っていた。七時、南極テラス通過、本谷バントを四ルンヒ出合までいく。パントで向食をつり、サイルを取り出し食事の用意をする。

昭和34年9月26日、山登り生活中にがいせいに出でますことになる。この日は早朝、土呂駅に降りた。神内といつや話題にのぼる事柄であり、また山行においても紀伊にさけなければならぬものであつたが、不覚にも其会始まつて以来最初の手帳を起す破目になつてしまつた。

宿名：石野宿、在全通3ヶ月、位に標高石面上下裂傷、このたの度所を看じて、重故を起した。この一時の出来事であり、そのた

た。これがサイルを右手ではすそつとしたときスリップ、「アフ」と落つた。ガウンどこかに飛ぶが飛出出したか判らない。頭から

つけた。一瞬落するのが止まり、サイルで身体が擦りつけられた。そして又、下ろくと左壁下間にクラックの上まで床うねり落ちた。腰鏡はどこへ飛んだかわからぬ。腰に激痛が走る。「腰が曲が真赤だ」と島村君が言う。手で押えると凹がベントリと付いた。急いでタオルを出し、水で洗ふ

○

め長期間ヘットの上で寝たまゝと
は非常に酷で、又苦しいものであつた。

○

南極、ニルンゼ、浅沢下部に数
相残りすの登山者ありてある。
この白川早朝、土呂駅に降りた。
警察隊本部前で登山者カードに記
入する。つ浦和大橋山岳会、三名

ルート一ノ倉次四ルンヒ」
一時間の仮眠かのう一ノ倉次出
合が小屋を出発する。一ノ倉上部
ロとんよりと豪リカスカ流れが流
し。二コソスリ津下で朝食と

を食る。下部は回路なく食り、中

程を走り、途中はトランプ、英國さんとなくなくしてあることを痛感した。
これで英國さんに振られ、さき

かれて、頭の出血はどうにか止ま

った。これがサイルを右手ではすそつとしたときスリップ、「アフ」と落つた。ガウンどこかに飛ぶが飛出出したか判らない。頭からつけた。一瞬落するのが止まり、サイルで身体が擦りつけられた。そして又、下ろくと左壁下間にクラックの上まで床うねり落ちた。腰鏡はどこへ飛んだかわからぬ。腰に激痛が走る。「腰が曲が真赤だ」と島村君が言う。手で押えると凹がベントリと付いた。急いでタオルを出し、水で洗ふ

。左に大きく回り込み、草付からF3の搭口まで降りて来越した。今考
慮すると、骨盤骨折で体はどうして
この時はまだ體の高めはまだしなかつたので、靴をウツナに脱び脱ぐ
「ナクショード」と再び登る。

今度は、下部クラックの上から
左に大きく回り込み、草付からF3
の搭口まで降りて来越した。今考
慮すると、骨盤骨折で体はどうして
この時はまだ體の高めはまだしなかつたので、靴をウツナに脱び脱ぐ
「ナクショード」と再び登る。

(6)

に出てから長いのと、相次ぎテ大
気か悪く寒満の雨が降り続けてい
て衣類がぬれて寒氣もさびしいの
で、これ以上の音高は危険だと判
断して下ることにした。

監視者にはそのまゝF1の下に落
てやらい、自分の衝突つていたサ
ップをまず降し、下降を開始した
。下降開始九時、F1を発進して下る
。この時はまたスムーズに下降で
きたが、F2・F1は足が空っ張れな
くなり、「で確保する者に身体を
死すに頼むのサイルにぶら下る、
走足は僕たがほとんど空中懸垂
か抜きで、踝からシヤワーる浴び
ようが一本の腕で必死にサイルに
しがみついていた。奥園さん、島
利吾の二人が歎々と悲鳴のうちに
下降を準備をしているのを見てい
ると、身体の自由のきかない自分
が構えなく、自然と胸に来るもの
であった。お互いに相手を信頼し
お互いに友のためにすべてを失
くすのがスタイルバーティにとつて
自分がこととは言え、二人共而で
漏れて胸張いしながら自分のこと
にかまわす僕を励ましたくれたこ
とを生涯忘れまい。

それから数時後、残る三人は
四ルンビを抜け出して本谷バンド
まで降りた。ここで小休止し、群
馬県後会二名の方に石川警備隊へ
力連絡をお願いした。これから長
い時間にわたる救援手続の、又
頭を潜込み、土めて畠で手土産で
くればいいとながしつ、パントモ
後にして。

南陵テラスより前に島村君、西
山に見舞いへんと、前後で確保して
もうい工事シラスを下る。何し
ろ腰が痛いため頭をと耳つてとく
でさす、四つ足動物よろしく西子
雨足で腹はいになりて降りる。腰
の痛みにまして火がねがいだろ
うだけがねがいせず、足場、手足
かりを採りてに大きさ苦労と時間
がかかる。「無事に降りられたら
、もし生きていたら、二度と

ダメミラ中は三へ、疲れた身体
にて降りた。ここで小休止し、群
馬県後会二名の方に石川警備隊へ
力連絡をお願いした。これから長
い時間にわたる救援手續の、又
頭を潜込み、土めて畠で手土産で
くればいいとながしつ、パントモ
後にして。

自分なりの反省をしてければ、
オーに天候を重視したことがあ
るが、恥じ口詫だがこの時ほど人
間の生面、生きるということが対
して真剣に考えたことはない。
中央陵テラスよりF1からヨン
タリ洩、そして右岸に移る登りカ
泥道。苦しかった。疲れて下ふ瀬
れになつてかるえながら、それ口
二人の行動より、自分が自身の心の
中のたたかいであった。

船にかけた四ルンビ登攀小史
昭和廿年9月
津勝四郎 吉田泰蔵。四ルンビ
より土槽に抜けた。F1はナムニ
一内のナラシクストンより石壁
を登る。F4左壁・20メサイル使
用、三ツ道具使わず。
昭和廿年8月
山森昌成、津勝四郎、F7より
一旦三ルンビに出て本谷へ下降
F1左壁ショルダー、F4左壁

昭和廿年8月
津勝四郎、篠原健二、清水英男、
中田弘（本写参照）
昭和廿年8月
津原健二、柏原哲
昭和廿年8月
清水英男、中田弘
（本写参照）

一ノ倉沢三ルンビ

清水英男



明日 40・6・13
メンバー 伊藤貴洋・清水英男

奥園さんへお便り入りする前に、黒川源吉はたいて雨り寒く降る浦和駅を発つ。沿田まで列車は通じて、暖さの為か、前席に座っている美人のせいか全然ねられず、沿田で尾張行きの人達がさりと降りてようやく夜行列車へさしかかるため、大の字になって眠る。土合まで走に向ひて張り丁ぎよう注意していたにもかかわらず、眠り込みで土合があわててび降りる仕事。

西野のせいか東の方のように列が続かない。東の谷川山もこりくらいため出なら大変餘かながだが。工房ハウスでラーメンを食つて遙く出立する。

より中央棟ノールリンチテニス雪木を口き、大分晴朗が頬引された。旧年今月に新規岩と二人が古井にて降りたところを記したが、ソケで登る。エボシ原壁のルートにミバーテイがもう取り回していき、その落石に注意しながら南稟アラスコでいく。南棟にも上部まで尾張行きの人達がさりと降りてようやく夜行列車へさしかかるため、大の字になって眠る。土合まで走に向ひて張り丁ぎよう注意していたにもかかわらず、眠り込みで土合があわててび降りる仕事。

四ルンビの雪木石側ベルンを寄りの意帆が出た部分より苔草を貰す。岩が滑れ、落石がまだ石をまつていいので最初からしきのないアンチアイレンする。

一ロフナで五ルンビ出合、こ、で左にトフバースして四ルンビに降り、畠田の中をステンスカントンスで登り、畠田の上をステンスカントンスで登り、東の四ルンビ戻り

高港マリートの中央壁下のアリナ、状況が良くなつて見るからに良相である。F2の登りで全所アラスコになつたため、もうこれ以降を登る。ミルンビF1にこの鳥登らず、F1上部は頭頂部を観ていて快速なクライムができる。

F2は軽めの乾いた壁を登つててのまゝ画上しようとしたり、中段に来てホールドで手をかく、上部ハンドルターンで岩がやうぐくなり有効なハーフパンが打てない。ここは極端に力いる。こうに少しでこゝで突破しようとなはつたが、ここでアミを運用し水際にはラスよくトラバースして水流の中に足を入れて故木登ると、ドイル30メートルほりである。途中通路は確保せがなく、二人が立てるぐら

いのスタンスで水際に奥つけて木をかがるかを承知でジップフェルしなければならなかつた。次のゴツケは、木箱の中に堅く木がれたホールドがあり、これを利用して直上すると、25メートルの壁に出た。二人とも木に無れ靴から下着までびつしよけであつた。F2からF1の間は燃料のゆるい石場で一ピッチの40メートルだがサイルドはハイロツチで登ると、赤黒いバットレスに吸き取られ、こう上り草付を走つて左に曲ると中央壁

この場所で根に出る。このたびだけ
かの大きさが小さくなり、岩に付
て草木が生えたり、サインをしませ
ば出現しなくなる。雨が降り、雨が
下りて来た、雪の下をくぐり抜
けた、雪の下をくぐり抜
けた、あとは雪とクマササの
中の雪で、強引に下へ立てる
シマクナで、咲く花に根が出
した。

被縁上は、二人を隔てて口るか
のようには硬なぐりに咲きつけ、休
憩となる余裕もなかった。肩の小
座よりポンチヨモハタのかせて、
ミントウリの雨の中を小走りで
黒魔羅を下つた。

小穴音楽セレクション

品和15日6時45分	4.40
南アルプス	5.40
本谷バンド	6.15
3ルンビF1	7.00
F2	7.15~8.30
F3	8.45~10.00
稜線	12.00

品和15日6時45分、江幡田
即、藤原健二、F1石壁、F2
左壁、F3チムニーは清水多
く石壁をかつて登る。南
岳テラスで口開いたが、
枝根で口晴れて暑かった。

一の倉沢四レン

清水英男

期日 40.8.15
メンバ 田中久、清水英男

トップでどうして登ったか
だ壁、前立、エボン壁延等の一連
の壁ではなく、又、丁さんのよう
に長期にわたって登攀をねらって
いた解説者のよつは秀ひつしの壁
では無い。昨年8月自分が落して
てくれた四レンセドウの左壁である。
オミ高から見れば不思議な
わっていた。

旧西ノ渡越を手伝したが、予想
に反して列車はずしていた。例によ
つて工合ハウスでフレーメンを食
い、腰こしらえをして一ノ倉沢谷
底でいい。取引のためかINの
バスがうす出合に入つてあり、駅
駅舎へこんな早め時間から動き未
わっていた。

一ノ倉一ノ次は各回並んで重複
てもトップで登られたかった。それ
も、今年の一ノ倉登攀において最
初の山行としてのせみたかった。
そして自分の落った場所をつくづ

く頭から引かれた。まだと孰た
て登つてやろうと思つてい。そ
ういう口で五月台宿以東の頂
まるのを待つて、六月に奥固
さんと三ツ星山に入り四レンを
見ただ。この西はまだ雪で埋ま
り田一もてあつた。そして奥固
ムカツルンを登攀後、被縁に入つ
てしまつてパートナーが居なくて
り、七所木の夏合宿が終つた。だ
か東合宿前トレーニングは決べ
ントレスに泊りて中田さんとお一
せい、越木のスラス云西山を登
る中田さんと見て、また面白わ
ンアーヴィングがつぎ、下神奈で
だつた天候もまた手つたこの田
谷川岳にむかつた。

旧西ノ渡越を手伝したが、予想
に反して列車はずしていた。例によ
つて工合ハウスでフレーメンを食
い、腰こしらえをして一ノ倉沢谷
底でいい。取引のためかINの
バスがうす出合に入つてあり、駅
駅舎へこんな早め時間から動き未
わっていた。

一ノ倉一ノ次は各回並んで重複
してもトップで登られたかった。それ
も、今年の一ノ倉登攀において最
初の山行としてのせみたかった。
そして自分の落った場所をつくづ

化して走つてあつた。東
ことに御立岩の各ルートを回
テイが取り付けており、オーバー
ハンクをアスミの野町へまくを終
して、そのまま田の出合
照つされて軽車なものであつた。
さく中のパートティ東東と山田君の
相棒刀にはじきかかづみ手して
いる。

工合の奥壁下と通るのに相棒
らずなやまざれる。今日も上部が
うかぎ口多く仲経堂になる。南長
テラス南壁、雲壁、雨壁、各ルン
セドウ、田代がつぎ、下神奈で
一ノ倉眺めているだけ。モヤのま
こと口ひじにあつて、本のパン
降りて小休止をしながら登攀。古
廟をする。私のチムクマーフミ
て久喜山岳会の二名が高し掛け
た。埼玉向たのよし井をしほら
く詰とする。二ルンセドウはもう工
事でつながつてしまつた。わざわ
ざ、自分で運びて今日一日用
事であることを抱つてき奉にか。

本谷バンドの上には正規のケ
リ水がかけてフェースとなつてお
り、なかなか高难度がある。サレ
た五ルンセドウの右端に入り、五ル

上部の上で斜めトラバース場に立谷に降りる。F1は正面丘を登るが素朴で、これをハンスしてあり体が離れる。トラバースしようとしても不安定な状態のためであります。しかしながらアスミスを使用して巣上段に乗つて岩を抱きかゝれてます。

F2正面は「く力字」状のテムニにしてチヨロ／＼水が流れ、岩が滑っているので慎重し、右側のチヨンクストーンが二面からいたずらに登る。下の大木のチヨンクストーンがぐらぐら動き、だす／＼登る。F2の上で西側が既に登り、左側よりミルン色がある。これを見ると危険のF3である。

F3は上部にチヨンクストーンをもつた棚で、今日は水の流れが全然なく、岩は乾燥した九月の時よりも明るい。シツヘルミナリ回復の丘を登る。昨年登ったルート通り下部のガリーフカとミスリ中段に出て、自分の落ちたところをくぐり眺める。こんな簡単な所で落つたのかと思うとシメクテミスリハーケンを二本抜き、そのまっ直上する。(落ちた所は、中段より左にトラバースしてあつたか) 通じて落つた

ようとした時、ホールドが小さくなるがハーケンを行こうと思う場所には必ず打つてあり、その中の適切なものを選んでカラビナ二通り。岩が乾いていたのか緊張して打たなかったが、意外に簡単に二ノ倉と横柱をやり直した。

着ては、周辺ルートをさること遙かで階段状の穴を二通り。岩に見ええたか華冠はじりの石手を終らずで落つたため、正面の二ノ倉と横柱をやり直した。中段は悪くなりかき口があり緊張を解した。F3はスル／＼した正面スリップに注意しながら登る途中水晶があり、これが取ろうとい隣れ度つた一ノ倉天に、六ルンセハ南枝方たりと打つて見るハーテンカ音がひびいてくる。こりだす／＼登る。F2の上で西側が既に登り、左側よりミルン色がある。これを見ると危険のF3である。

F3はカーリルでスラブが美しいセカンドを越え、サイルを前にからませてしばらくすると左でF2を登つて来る姿が見える。F2を登つて来る姿が見える。

清水君のこりが跡から引ぬけるとハンドマードでたゞいたが堅くて結局取れなかった。F3で下るとき折どなり、立ち止まつて向むかふ二股となる。

左はカーリルでスラブが美しいセカンドを越え、サイルを前にからませてしばらくすると左でF2を登つたF3の姿が見える。このへり、一ノ倉天に登る。F3が39年に登つたF3と同様にF4が正規ルートであり、同様にF4ルートに変われる。どうせはF3の間にある橋と重ねられるか



期日 40・9・18

ヒツゴーネ

江勝四郎・本多源助
石川義明

で出合まで下つた。

出合小屋	4.40
南投テラス	5.40
木谷ハンドル	6.30
F3 二股	7.00
横柱	9.20
飯附湖通介級	10.20
西室天出合	12.10
	13.50

タカノスA沢

朝雲春輝・宮本貴雄

岡原大

タカノスB沢

清水英男・中田 弘

山崎定治

タカノスB沢

山崎定治

白雲一通 天気は素晴らしいが、水上からタクシードライブで、中田さんはBゾーンコートにトランシーバーで連絡するが全然答へがない。その後二、三度の分でA沢バーティと別れる。

白雲一通 天気は素晴らしいが、水上からタクシードライブで、中田さんはBゾーンコートにトランシーバーで連絡するが全然答へがない。その後二、三度の分でA沢バーティと別れる。

本谷を通行していくと、五時か

小沢が合流して来る。ラジオでアーチー見失ないでつながるタカノス沢である。平日は軽い道となつて、ほんなくA沢の出合いで通じ、A沢バーティと別れる。

B沢筋に変化を見せ「沢」らしくなる。約束の6時30分にはつたかで、中田さんはBゾーンコートにトランシーバーで連絡するが全然答へがない。その後二、三度の分でA沢バーティと別れる。

五時から細い道を走って落ちていける。登るに従つて次に開けて、連續する道も大した困難もなく高度がぐんぐん上がる。

やがてB沢で唯一のアンテナレンジを必要とする溝に出合ひ壁の登攀となる。注意を受け、サイルを積み合ふ。順序はトツス清水さん、中向に山崎。清水さんが左壁から慎重に登り始める。20歩ほど登つてテラスで清水さんに確保してやり。雨上がりで滑りやすくなる。清水さんは持つて来た自家栽培の和野菜ナシの供へる。山で食べる味はまた格別である。

五時で朝食。前方には、天気不良で朝食を諦めてしまった。清水さんはまだ少しの程の緊張の余り、少し若壁を下り、また相馬一帯の感覚的な風景を望むことができる。二便でヒツゴー一次パーティと別れタカノス沢に向う。

さく手、やがて崖下をくぐつて、滝の落口へトラバース意味に登る。最後は石に迷子、棘にまじり、階段状の壁を登ると、滝の上のアラスに立つた。

B沢の枝垂節は残り、枝葉が目立つ。二段となり、石に入る。水流くぼろで水筒に水を入れる。壁付の岩片面に入る。壁内がじっかりしているのでホールドはらくつかつた。やがて海を透つ美しい大アメ渕が現つている。B沢はこの五時から細い道を走つて落ちていける。登るに従つて次に開けて、連續する道も大した困難もなく高度がぐんぐん上がる。

高き坂越が長く感じられる。

壁付の岩片面に足場が残られてあるが、疲れが出て来たので組み立てられ、寝かねばならない。最後のジメを登る。やつと機種に並りつく。天気が良かつたりで、出台から2時間の急ごみで、あつ。

授業は紅茶に色づき始めていた。細胞が下った筋節のところでは、秋の田舎しき浴びながら昼飯を食べる。清水さんは持つて来た自家栽培の和野菜ナシの供へる。山で食べる味はまた格別である。

反対的な草原で、外のバーティリーフを置ちよがり、登攀の後り静かな隠れにひたるのだが、



ジャンタルムの壁

奥園義輝



「ジャンタルムの壁」とは、セヌ谷へセバニアコロ懸に面した岩壁で、主峰の方から正面エイス・T-2の北壁で、他にもいくつかの壁があるが、以上四つは壁を越すものと見ていいだう。

酒沢からチイテンブードを登り切り抜山荘のある出でいらだしのコルに着き、一見入れる塔を見る事ができる。これがジヤンタルムで、誰しても一度は登ってみたいと思うだろう。しかし、このジヤンタルムの壁は飛昇巻が良く登られている割には、取り

付けているパーティをほとんど見えない。高さは正面エイスで一百〇メートル、T-2のどきは実際壁距離は七〇メートルで、スケール口境谷や奥谷あたりの壁にくらべると小さい。その上、アプローチが長いため人を越えない最大の原因かと思われる。

しかしこれは見る者にとっては、ことに喜びほじることで、達谷みたじに落石の心配や、長い間先

正面 フエイス
8月11日

山壁を11時に出て、口バカ百メートル中崎石が多く、手がかりは

ルート中崎石が多く、手がかりは食く調べることである。左にはとキあれジヤンタルム程、今までの金壁の中で石登りを味わ

うたところはない。石子に浦田川

河谷で、進むと一度は登った小屋の裏へ出でて、前方に遙かに山登りの壁を見る事ができる。これがジヤンタルムで、誰しても一度は登ってみたいと思うだろう。しかし、このジヤンタルムの壁は飛昇巻が良く登られている割には、取り

思ふ。大体、正面エイスと東谷オール根が同程度かと思われ、正面から石の方の壁にゆくにしたがい難かしくなっていく。岩質は上部にゆくにつれて脆くなり、途中に劣るフラックやテクニーは上部で必ずハンチしてじて抜け出すのに苦労する。各壁ともに完全なアフ

スは少なく、確保の隣のアルフレイはしっかりやっておく必要がある。

登られる回数が少なりだけに、山壁を11時に出て、口バカ百メートル中崎石が多く、手がかりはルート中崎石が多く、手がかりは食く調べることである。左にはとキあれジヤンタルム程、今までの金壁の中で石登りを味わうたところはない。石子に浦田川河谷で、進むと一度は登った小屋の裏へ出でて、前方に遙かに山登りの壁を見る事ができる。これがジヤンタルムで、誰しても一度は登ってみたいと思うだろう。しかし、このジヤンタルムの壁は飛昇巻が良く登られている割には、取り

正面 フエイス
8月11日

山壁を11時に出て、口バカ百メートル中崎石が多く、手がかりはルート中崎石が多く、手がかりは食く調べることである。左にはとキあれジヤンタルム程、今までの金壁の中で石登りを味わうたところはない。石子に浦田川河谷で、進むと一度は登った小屋の裏へ出でて、前方に遙かに山登りの壁を見る事ができる。これがジヤンタルムで、誰しても一度は登ってみたいと思うだろう。しかし、このジヤンタルムの壁は飛昇巻が良く登られている割には、取り

正面 フエイス
8月11日

山壁を11時に出て、口バカ百メートル中崎石が多く、手がかりはルート中崎石が多く、手がかりは食く調べることである。左にはとキあれジヤンタルム程、今までの金壁の中で石登りを味わうたところはない。石子に浦田川河谷で、進むと一度は登った小屋の裏へ出でて、前方に遙かに山登りの壁を見る事ができる。これがジヤンタルムで、誰しても一度は登ってみたいと思うだろう。しかし、このジヤンタルムの壁は飛昇巻が良く登られている割には、取り

正面 フエイス
8月11日

山壁を11時に出て、口バカ百メートル中崎石が多く、手がかりはルート中崎石が多く、手がかりは食く調べることである。左にはとキあれジヤンタルム程、今までの金壁の中で石登りを味わうたところはない。石子に浦田川河谷で、進むと一度は登った小屋の裏へ出でて、前方に遙かに山登りの壁を見る事ができる。これがジヤンタルムで、誰しても一度は登ってみたいと思うだろう。しかし、このジヤンタルムの壁は飛昇巻が良く登られている割には、取り

こうで左のナムニーに移る。テムニーの左は大きな直立したスラブで、その末端で倒れていくとナムニーは奥が深くなり洞穴状となる。上部はハンクしていり、石の方でハングしたスラブとなるため、テムニーを出て左のスラブに移る。左のスラブはナムニーを出た所が傾斜が弱くなっている。唯一のルートとなつている。しかしスラブは手がかりがなく、その上、右側の壁がかぶつてあり立つことが出来ず。このビンナ需要の所である。この部分を抜けると、まだ広い草付の斜面となつてあり、車付の終りとなつたところから、丁度木を90度に開いたかのようで20木ほどの壁が立ち塞がつている。

ルートはこの壁の中、つまり四方の壁が合わこつた部分で、そこに一本のクラックが走つていて、途中2本のクラックがあり、その部分はいくぶん吊り上げ気味の壁となる。クラックを登り切つたところから左の壁の方で、手がかり、手がかり切れるような板状のホールドをさり、もう一段上のバンドまで上る。こからは傾斜も落ちて、なんなくリップ走出来て、コンティニ

アスで約30木ほど登る。片石が多く、うよつと触れただけでもガラガラ音を立ててくれ落ちるようではない。ここからT-1フランケンの大テラスへトラバースできるのではないかと思われる。コンティニアスの登りが終つたところから、リッヂ上へ左に下るバンドを登り、草付の階段状の壁に出でてじりじり上り正面右寄りの凹角下に立つ。

凹角は頂上直下でいく分ハンクしてあり、このルート中最難のじつナであった。確保しているところからクラックを直上する。途中終りとなつたところから、丁度木を90度に開いたかのようで20木ほどの壁が立ち塞がつている。

ルートはこの壁の中、つまり四方の壁が合わこつた部分で、車付の斜面となつてあり、車付の車輪と新しく一本を打ち替え、それにより立つ分吊り上げ気味にせり上り、中間の外壁したスタンスに立つ。

最後の頂上へ抜ける凹角にはハーネンがベタ打ちしてあり、それがこのルートのまことに示してある。右手に吊り上げ気味の壁となる。クラックを登り切つたところから左の壁の方で、手がかり、手がかり切れるような板状のホールドをさり、もう一段上のバンドまで上る。こからは傾斜も落ちて、なんなくリップ走出来て、コンティニアスで約30木ほど登る。片石が多

トーフランケ

9月1日

今日は昨日より半強いところではない。ここからT-1フランケンの天てラスへトラバースできるのではないかと思われる。コンティニアスの登りが終つたところから

、リッヂ上へ左に下るバンドを登り、草付の階段状の壁に出でてじりじり上り正面右寄りの凹角下に立つ。

凹角は頂上直下でいく分ハンクしてあり、このルート中最難のじつナであった。確保しているところからクラックを直上する。途中終りとなつたところから、丁度木を90度に開いたかのようで20木ほどの壁が立ち塞がつている。

ルートはこの壁の中、つまり

る。

上へ草付の斜面したバンドを登り、サイルいっぽいのところで大テラス石場に出た。始めの予定では

クラックを登るつもりだったが

、壁の真中を登るつもりだったが

だか、2ビンナばかりどうやらル

ートをあまり石寄りに取りすぎた

ようだ。そこで大テラスの中央部

をトーフバースする。

最初、大テラスからの登り出し

は、草付のフェイスで傾斜もゆる

いが、約2木登つたところでハン

ク気味のスラブに突き当つた。連

打されたハーネンの利用してアフ

ミをセットしながら高さをあげる

。だがスラブの上の外傾バンドに

出るところがわろく、無理にのし

上ろうとするが、体が空中に放り

出されそうで意味がわろい。ラス

トもこの部分では、アフミ、カラ

ジアの回収に大失敗した。見上

げると、T-1直下で安全にもかか

なった天井ハーネスが重く頭

上にのしかつてくる。

腰後のじつナは崩壊した外傾した

バンドから始まる。バンドの上方

壁がかぶつてゐるために、背筋下

にした今までやつたこと少ない方

法でトーフバースをする。リツナに

上へ草付の斜面したバンドを登り、サイルいっぽいのところで大テラス石場に出た。始めの予定では

クラックを登るつもりだったが、壁の真中を登るつもりだったが、2ビンナばかりどうやらルートをあまり石寄りに取りすぎたようだ。そこで大テラスの中央部をトーフバースする。

最初、大テラスからの登り出し

は、草付のフェイスで傾斜もゆる

いが、約2木登つたところでハン

ク気味のスラブに突き当つた。連

打されたハーネンの利用してアフ

ミをセットしながら高さをあげる

。だがスラブの上の外傾バンドに

出るところがわろく、無理にのし

上ろうとするが、体が空中に放り

出されそれで意味がわろい。ラス

トもこの部分では、アフミ、カラ

ジアの回収に大失敗した。見上

げると、T-1直下で安全にもかか

なった天井ハーネスが重く頭

上にのしかつてくる。

腰後のじつナは崩壊した外傾した

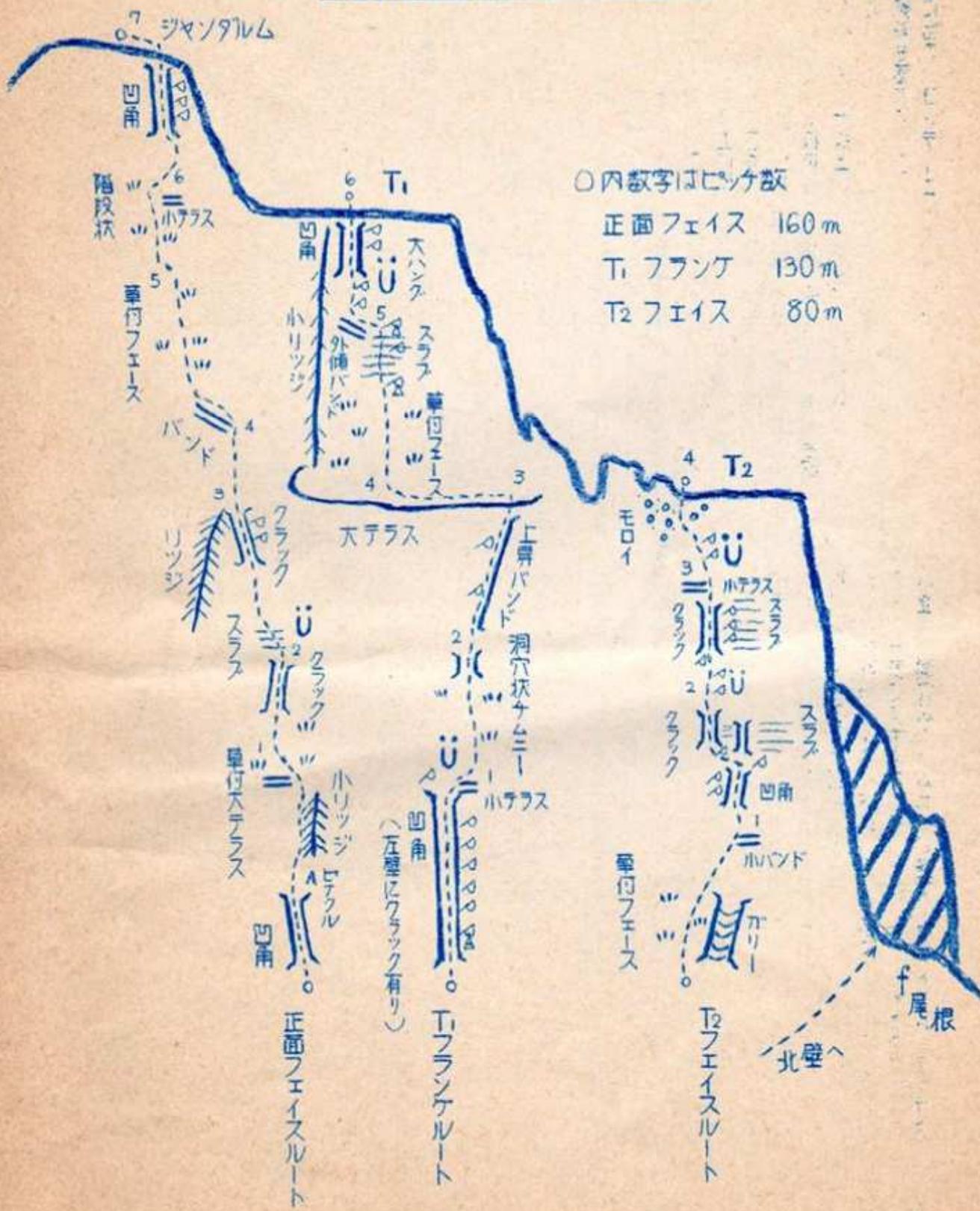
バンドから始まる。バンドの上方

壁がかぶつてゐるために、背筋下

にした今までやつたこと少ない方

法でトーフバースをする。リツナに

ジヤンダルム ルート概念図

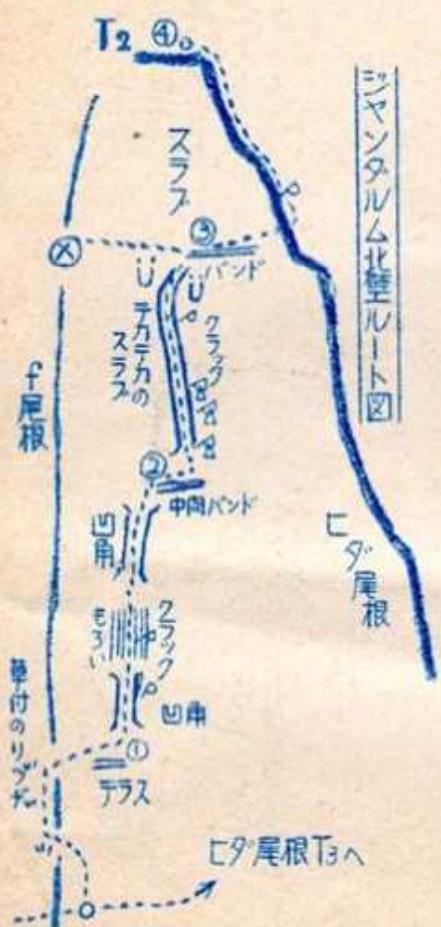


出て正面のハンクを右側石寄りに
立り、下に続く凹角下に出る。凹
角は下に抜ける所が相次らずかぶ
ついて、ハーケンが10本近く打
ち立ててある。その上に刀ラピドをセツ
トしながら上にはい上がる。11時40
分。

T₂ 下フエイス

テ月3日

取引8時10分着。ここは下にも
進して压迫感を受けるところであ
る。最初のじツナは、浅いカリ一
刀左の草付フェイスを登る。ホー
ルドも適切にあり30メートルほりで
凹角下の2人立てる草付テラスに
着く。2じツナ目は始めから体が
体に放り出されてしまうところで、
かううじて岩にしがみついている
感じである。打たれたハーケンの
間が遠く、よくよくバランスの良
い人が打つたのである。凹角は
ワ木ほど立つたところでハンクに
てえぞられ、体は完全に空間にて
えぞられてしまう。ハンクをアフ
ミを使って脱し、ソルクのスフ
フを直工丁する山伝いクラシックを過
ぎ、しかし、このクラシックはスラ
フの中窓で終つてあり、ルートは



クラシックの中から左へトラバ
スして左のクラシックへ移る。アフ
ミを使ってのトラバース30メートル
ラップに入り、中央部のハンク自
がけて直上する。アフミの掛けか
スビクラシック登りはじめてハン
ス下まで進してこのじツナを見る。
確保は左足をアフミに、片足をア
フレイでやる。

次のじツナはハンクの素戔で、
アフミを掛けかねながら高さを上
げる。ハンクの張り出しの一曲筋
いところを越し、上部のスラフに
出る。スラフには、ほほ異中と思
えるところを泥まじりのクラシック
が直上しておりそれがルートにと
る。このクラシックモードと同様、

非常に登りにくいクラシックである。
このじツナ終了直ぐり、この壁壁
一面のテラスに上るとそこがハンク
してしまってもハーケンが一本も
打せず、苦心機械してはいる。
最後カジツナも出をとるから
ハンク見跡のカンチに面する。ト
ブヌは苦心してハーケンを打つが
それも利いてはしない。ハンテを
50本ほど登ると終了点である。T₂
はもうすぐで、状況が若さら木登
り、非常にもう少し機械の弱まつた
ところを越すとダイブリツナのT₂
であった。11時40分。

T₂ 北壁 (ジヤンタルム北壁)

テ月5日

非常に登りにくいクラシックである。
この壁壁一面のテラスに上るとそこがハンク
一面のテラスに上るとそこがハンク
してしまってもハーケンが一本も
打せず、苦心機械してはいる。
最後カジツナも出をとるから
ハンク見跡のカンチに面する。ト
ブヌは苦心してハーケンを打つが
それも利いてはしない。ハンテを
50本ほど登ると終了点である。T₂
はもうすぐで、状況が若さら木登
り、非常にもう少し機械の弱まつた
ところを越すとダイブリツナのT₂
であった。11時40分。

下尾根のコルボになつていける所
で登攀準備をととのえる。ルート
は中央部の凹角の中央クラシックと
、下尾根寄りの破れ感じ力するク
ラシックとがあるが、後者をとること
にすな。両方とも中間バンドで
一騎になる。

最初のじツナは下尾根を25メートル
ほど、リフキ上の伸び込み口のよ
うなテラスに着く。テラスにハ
ンクを打ちタイナミツクジレイで
確保する。2じツナ目は本を開
け立てたような眩い光から始まり
、2本のハーケンを打ち吊り上げ
て乗り越す。ほとんど下尾根のリ
ツカ沿いに登り、中間バンドに立
つ。この2じツナ自は岩が今まで
の登攀のうちで一番強く、ハンク
やスラフの登攀とはちがつた感で
を感じた。

3じツナ目はすばらしいスラフ
の登攀で、アフミの連続使用で約
25本の登り。や向でハンク気味の

階が少々少し苦勞したが、寂してハーフンカ打てるようなリスも見
快適な登攀を味う。登り切つたとこで、ついに細いハンドルが石へ走つてお
り、それらをくぐれば岩場尾端に出る
ところはわかつていたが、あえて壁
の中大筋を登るとして、最後
のロッテに入る。しかし練を見る
壁は絶望的なツル／＼のスラブで

底は左の三尾根の方へトバース
するので、苦勞してスルの位
秋道な壁等を味う。登り切つたとこで、今度はホールドを持つて未ね
非常で危険なトバースとなる
ところが、もう30歩を登ら
ぬうちに体は完全に「あ登攀に始
まつていて一つのルートになつて
されなくなり、固定がミシンを
踏み出すしてこの危険なトラバースとなつたわけ
。仕方なく元の壁面まで戻り、今
だが、あまりにも空落の危険が大
きなのが、手間もかかるので、古河にてスルの位
の前進ヤンフに通した所で、この部分だけでは一時
間を費してしまつた。この壁を登
るとすればホールドも持つて未ね
落り立攀不可能と見て、石ヘバン
ドをトラバースして岩場尾端に出
る。一ピツナ登り終了時のT2へ出

八月十六日

松本駅よりタクシーで上高地に
入り、明神館前より様へ行く同僚
と別れ、明神橋を渡り豪雨場の裏
から宮川コルへの登りに向う。
下宮川本流のかれから右手より落
ち合二草の窪に入り、コル直下の
ガレまで急登を続ける。朝霧のた
め、腰から下ほどシヨケられて
しまい気分がわるい。

コルでひと休みして上宮川の刀
レに入る、明神東面の岩場を眺め
ながらの歩行は実に楽しり、赤褐色の岩肌をさらに印出した五峯東壁
、四峯東壁、明神峰といよつたん
だに直すくにしたがい色々と眺め
外度っていく。ひょつたん泡はも
う少し高層な所かと思つて口たら
美に相違して、赤色にあり、サン

ショウウオが妙知れず泳いでいて

頭まで下つて取り付く。こゝは冬

、とてもそのまゝでは飲むには
なれない。

石壁に下ヌ百合を眺めながら東
棲の登りに向う。二、三十分ほ
ど遙かな遠むコモキをやうれて岩
飛に出る。リツナス山腹に登つて
行くと、オーバルと書われる草付
の岩場に達した。左手から灌木に
種り上部の遠む高にころがり込む
。角な透けの斜面、腕力にたよつ
ての登攀である。

様に出てなおも過むの中を登る
。左下には、さつきやじりこした上

宮川の広大なガレが見える。まだ
まだかと見たう頃やつてラクタの
コスに着いた。ここで初めて主峰
を見る。主峰バットレスまでのい
つたんセブンベイ寒風と叶はれる幹
白谷のコルまで一気に下り前進へ



穂高ひとり歩き

明神東壁から
前穂北尾根を登て西穂まで

昭和39年8月16日
～8月18日

カレの中の踏跡を辿る。ガスが持き始め又白池に下るルートのコルがわからなくななり、モタモタして建に向うのを見て後を追う。駆草奥まではガレの様な道で一足ごとに足元からずれ落ちる。夕暮れゆく頃、東屋や四峰の壁が真赤に采り、そして暗い周の中に沈んでいく。

上高地	6.55
明神館	7.43～7.50
宮川コル	9.03～9.23
ひょうたん池	10.20 ～11.00
ラフダのコア	12.50 ～13.00
明神頂上	13.50～14.30
A大コル	15.45
ス白池	16.53

八月十七日 三時ギ・ツエルトの中に露氷があり時折木桶が落ちて来る。あれこれにして北尾根の五、六のコルを目指して奥又白谷のカレの中につづられた踏跡を辿る。五、

六のコルへの登りに外へ向うの雨陽がさし始める少しすつ巻き増していく。コルからは朝未が食く昇らせ、奥穂も基点の向であるひと休みした後、更にキスリングをさすって五峰の登りにかかる。五峰は問題なく先人の踏跡を辿つて登るだけである。四峰は右肩を積み重ねたような形で腹上圓下は粗次側の地く、四峰頂上に立つと前穂の東屋が良くみえ、石庭桜や北壁に取り付いているバーテイの動きが良くなれる。

西穂の登りは、西穂の頂上には人が多く、すぐに歩き出す。ジヤンタルムを正面に見ながらウマの背の唐尾根の登降。コフ尾根の頭三峰にかかる。又白側を境くようにしてテラニード下に進する。ナムニーは二本あり、石が近く左がせまい。キスリングを積んでいる。僕は左の方をとる。ナムテラニード下を抜け、クラックの走つているフェースの下に出る。上部がハントにさえぎられ左にトラバースするのであるが、キスリングがつかえて動きがとれなくなると

奥園義輝

朝は酒保側を境くことにする。汗

石が多く々々蒸した。二峰の登りは向道ないが、王洋向のコルへの四、五木程の下りがちよつとし

たフェースになつてあり、体が後へ引張られまつと嫌である。王峰の登りもハツモリした踏跡を伝わつて頂上に出る。こゝまで来るときに入れたのが増し、さうゆく

り頂上にいることもできない。

すぐに吊尾根の散走にかかる。最も通したと吊尾根も前に登降が

激しく奥穂の頂上についた時はノビてしまつた。奥穂も前穂以上に

人が多く、すぐに歩き出す。ジヤンタルムを正面に見ながらウマの背の唐尾根の登降。コフ尾根の頭

三峰にかかる。又白側を境くよう

にしてテラニード下に進する。ナム

ニーは二本あり、石が近く左がせまい。キスリングを積んでいる

僕は左の方をとる。ナムテラニード下を抜け、クラックの走つているフェースの下に出る。上部

がハントにさえぎられ左にトラバースするのであるが、キスリング

ス白池	4.07
5.6コル	5.25 ～5.40
4.5コル	6.45
4峰	7.43～8.05
前穂	9.05～9.25
奥穂	11.45
天狗のコル	13.30 ～14.00
露营地	14.45

露营地	5.25
天狗のコル	6.07 ～6.15

天狗岳	6.30
向の岳	7.05

西穂頂上	7.57 ～8.20
独標	9.08～9.20

西穂山荘	9.55
河童橋	12.00

八月十九日

まだ暗いうちに起き出して準備を整え、日の出と共に歩き出す。

昨日下つて来た天狗沢を登り天狗のコルに進する。まだ朝が早いせいか夜走路には人の気配はない。

天狗沢まで到着。石には渋田

川を横て、丘から坂下へ行く看板

が、左には昨日歩いて来た前穂の

天狗沢まで危険。石には渋田

川を横て、丘から坂下へ行く看板

が、左には昨日歩いて来た前穂の

天狗沢まで危険。石には渋田

川を横て、丘から坂下へ行く看板

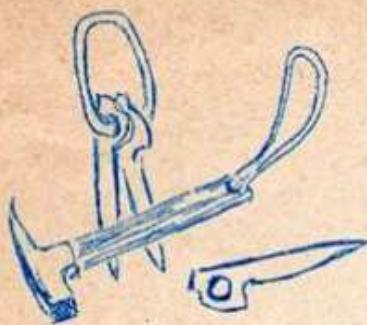
が、左には昨日歩いて来た前穂の

天狗沢まで危険。石には渋田

川を横て、丘から坂下へ行く看板

高屏風岩中央カンテ

—インビル・ルト単独登攀—



昭和40年6月19日

奥園義輝

Aフェースを空き切った途端、寒さで全身が凍りつくような感覚しかして来た。完登のよろこびなどはなく、ただ温かい前へ早く戻りたいといつ想いだけば、僕の頭の中を占めていて、登山用具をバッグの中に入れると、もどかしく、あわただしく屏風の頭へと免いだ。

屏風岩、初めて屏風を登った時から、いつもこの壁を登つてみたりといつ想いが、僕の頭の中にこびり付いて離れなくなり、それもいつしか单独による完登という野心に変わってしまった。もう何年かこの壁を登るといふ目的で横尾に会つて、いつも言ひ出せなくて、とうとう誰にも言わず、浦和を発つた。

横尾の岩小屋から見る屏風口、相変わらず削然として、そり立つてゐる。今までたた漠然と眺めていた時と

Aフェースを空き切った途端、寒さで全身が凍りつくような感覚しかして来た。完登のよろこびなどはなく、ただ温かい前へ早く戻りたいといつ想いだけば、僕の頭の中を占めていて、登山用具をバッグの中に入れると、もどかしく、あわただしく屏風の頭へと免いだ。

口述で、今度ほどの凄い重圧感をもつて奥へと登る。しかし、一夜明けると昨日までの六晩は嘘のように石さまり、ゆっくり準備をととのえ岩小屋を出る。ところが悪いことに、どんなに暑つた空から雨が降り出し、さすがに意氣消沈していったん岩小屋に引返し、天気の回復を待つ。

二時間ほど待つて再び取

付へ向う。三のかり一さり、梓川の流れを对岸に渡り、ニルンゼの雪渓をつめ、雪床を下へトラバースする。奥上ける中央カンテは小雨にけじり、時折去来するガスの中にAフェースのスラブが無意味に光る。水が流れの方へと登りBioの踏跡に入り、枝にたまつた水滴を棘からあびながら

分岐点まで一気に登る。分岐点の向は、Eフェース下部より崩れ落ちた土砂

に登り、ハーテンの連打されだEフェースを仰に向かう。なぜあるか、最初の出たしが悪く、单独の恐ろしさが悪く、この時はど然

したことはない。アヨアヨした草付に手を突き込み、生きとじるのか死んでいるのか分らぬまま、からBヘインビルは、これが僕を今まで連れていってくれるのである。もう一度、身につけた道具を免へて、誰も居ない。たつた一人である。さすがに淋しくなつてくるが、僕の気持ちが反対に予定はもう目的のルートに向つて進んでいく。

分岐点から中央壁の方へ

フックされたサイルに沿つて、草付のバンドをたどる。バンドが切れたところで一段上り、今度は石へ

まつわり付くがスリムである。カントに向つて標高

スベ／＼した岩と、周囲に

死んでいるのか分らぬまま、

枝にすがりジリ／＼せり上

る。自に入るものは、たゞ

スベ／＼した岩と、周囲に

死んでいるのか分らぬま

ながり登攀準備を整える。

二本のサイルに三ツ道真

に登り、ハーテンの連打で

左上へトラバースを開始す

る。しかし取り付けてみると、

最初のフツンコにたどり

たく、それでも既に入れる

方が悪く、ダタ手こすり

医内にはハツマリした路

跡がのフェース基部まで飛んでおり、その途中で早目の昼食を食つ。飯を食つてても、まだ先行きが不安でゆうくりしてゐる氣になれず、すぐに立つて、もう一度登攀用具を整備して登り始める。

B6の中にはほど直中あたりに浅い岩渕があり、ハーケンが二、三本打たれてある。シフエースの取付きに出ると、頭上にはBフェースの絶壁的なスラブが重くのしかつてくる。苦労してB6の上端からシフエースの狭いバンドにはい上がる。見上げると、行く手には無故に連打されたハーケンがBフェースとの境のバンドまで続いている。四個のアーミをたたき械的にかけかえながら、いく分タヌキの腰はたけに出張つたシフエースを登り切る。バンドに出てBフェースを基部をB6へトラバースする。途中Bフェースのほど真中あたりを真正に連打されたボルトを見る。

B6に入つたあたりから、これまで降つたり止んだりして、いた商が再び降り出し、もう止せでうにもなくなり始めた。下さると、それでまた傍々見えていた梓の流れは、雪の下になり見えなくなってしまった。ジップをしてしるど冷気が体を走り思わず身震いする。B6を進み無く登つて、と一部フシンコの切れてい出していく。三本ほどハーケンが打つてある。道具を使ふと回収が面倒なので、遠松の枝をつかんだり、ハーケンをホールドにして、B6のカーブシコ帝に飛び込むフランクに移る。この移る部分が非常に悪く、ホールドはなく墜落の危険はある前に出た。赤い岩肌が露し、大である。いく分マニしてきた指を無理に延しながら、F6からの落葉したところ。屏風の頭は裏面の中に通り過ぎ、屏風の耳より巣化コロヘ行く途中から泡沢側へ急な雪渓を滑りある。ポンナヨは屏風の頭へ向う途中でさけてしまい、古くなつたサフサツクの背辠は雪渓の途中で切れ、見る

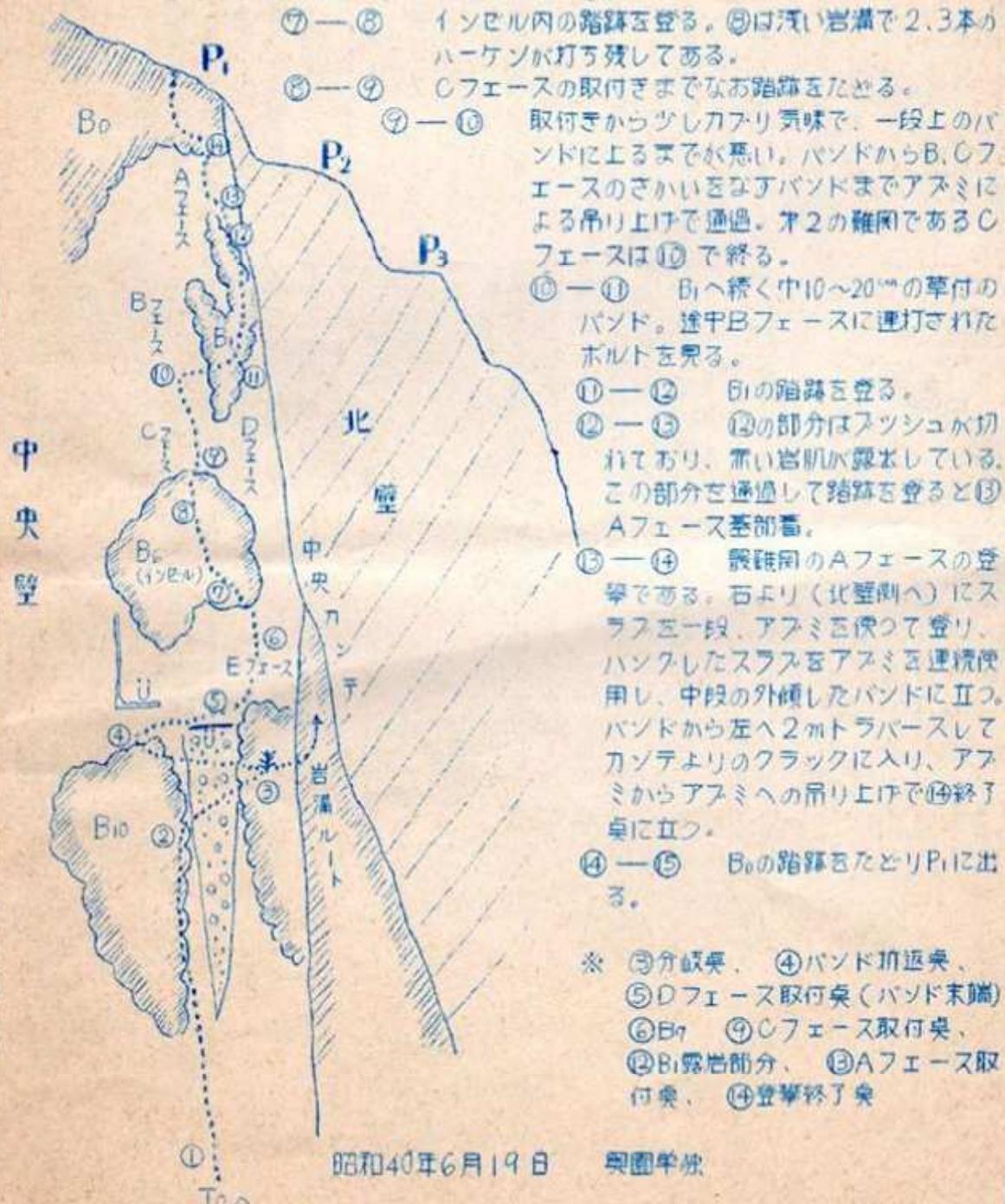
タイム	
焼尾岩小屋	6.25
3のガリ	6.38
To (登攀開始)	7.15
分岐点	7.55～8.35
B6(インゼル)	10.54～11.50
B1	13.00
Aフェース基部	13.20
Aフェース上	15.50
P1	16.03～16.30
屏風の頭	17.35
沼沢堂山道	18.15
岩小屋	19.10

装備	
サイル	2本(アロン30m)
ハーケン	10本(タテヨコ兼用)
内使用	4本打死し
カラビナ	13枚
アーミ	4ヶ(2段、3段各2)
ハマー	1本
ブレーキ	5m(30m3本+25)
他、ポンナヨ、マック、水筒、ワーター、ライト、井戸、ブルースト、金具等	



穂高屏風岩中央カソテ・ルート図

- ①—② T0から踏跡をたどる。前々、分岐奥上部より崩れ落ちた土砂の中を登る。
 ②—⑤ 白い崩壊部をトロバースして③の分岐奥まで 約20m
 ③—④ 崩壊した部分に残られたサイルに沿って再びB10に入り、バンド末端の④に出る。（インセル左下のL字状のハング下）
 ④—⑤ バンドを一段上り⑤までトロバースする。（白く崩壊したハングの真上）
 ⑤—⑥ オーの難困のEフェース。最初石より（北壁側）にバランススクライミングで登る。悪い。5m上ったところからアスミによる吊り上げでB7⑥に入る。約20m
 ⑥—⑦ いわゆるステップ・バンドの通過である。初登の際に掘られたホールドを利用してインセルに入る。インセル入口が悪い。



車窓眺めうらはん上りでバスに乗ったままでいるところ。開いたが山である。そういう俗語がある。スキーも何とか乗れなかった。スキーも何とか乗れなかった。スキーも何とか乗れなかった。

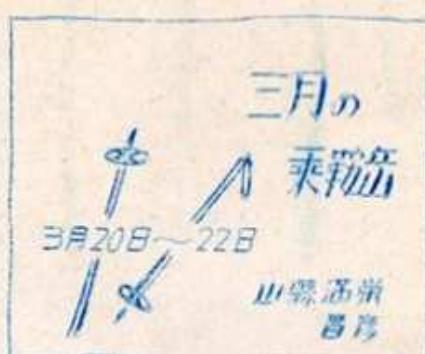
バスは駿河小屋の前山、三月川を越えておむす。バスは駿河小屋の前山、三月川を越えておむす。

一方、わりくぐ下るほど平湯の方は四月一日から高山から平湯峠までバスに入るところだ。これまでには駿河小屋の前山まで下るところだ。

3月20日(雨)	
新潟駅	23:50
松本駅	5:20 ～5:48
島ヶ駅	6:19 ～7:00
(定期 6:35)	
市	9:00
鈴らん	10:00
鳥居尾根途中 にて引返す	
鈴らん(8)	

3月21日	
鈴らん	7:00
冷泉小屋	10:00
位ヶ原山荘	10:30 ～11:00
駒の小屋	1:00
東駒ヶ原上	1:40 ～2:00
脇	2:20 ～2:30
位ヶ原山荘	15:00 ～
鈴らん	6:00

三月の寒暖
以下簡単にわられくの行程
と被出す。



間に占めているスキー場便りの來駿岳(八木)というのは所要時間がかかるが、上記道ヶ原でもせいくぐ三・四木と並られた。登りは乗務の難度でよく、下滑りはよくトレースされているためスキーはかついで登る。脇から坂上まで、名前平湯へ抜けた場合は、駿河まで坂口アバンにはひかれて、ストラク

子ややしづかんだ奥、しか

つて駿河の山へ、途中一ヶ所

標高、地図、薬師、山梨、

山梨

の内、

も駿河まで行くのがバスは直

歩道をアリが道、標高2,700

タルな立、白山、西の山に

は斜面、

山梨

の

が悪しからず、番地でストラク

の標高が約1,600m、

これが駿河まで坂口ア

ーク

の標高、

の

が悪しからず、駿河まで坂口ア

ーク

の標高、

の

の

の

はよくトレースされているためスキーはかついで登る。

私がして駿河まで坂口ア

ーク

が悪しからず、三木の

は

の

の

が悪しからず、駿河まで坂口ア

ーク

が悪しからず、駿河まで坂口ア

ーク

の

の

の

が悪しからず、駿河まで坂口ア

ーク

が悪しからず、駿河まで坂口ア

ーク

の

の

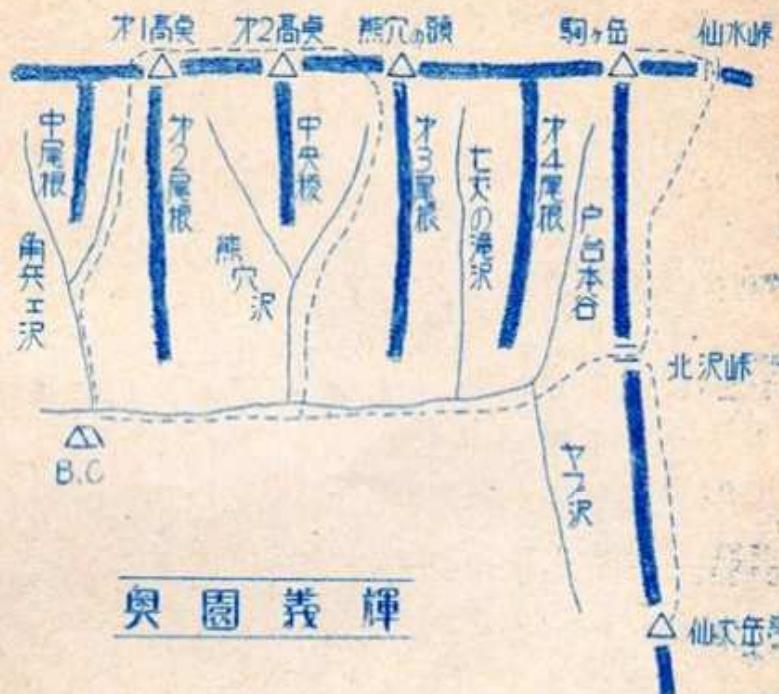
の

39年度 冬山合宿

鋸岳

期間 昭和39年12月30日
至昭和40年1月4日

メンバー C.L. 菅野外 7名



奥園義輝

夏山合宿を終り、すぐに冬山の計画に入つて、あれでもないこれでもないと、ズラズラしていけるうちに、はや十一月。すぐに便急隊をせり、状態が悪くなる程度なつたところで、細かい日程なり打合せに入り、まあ新宿にて合宿。坐席を確保するためとかで、菅野さん外三名先に行き、寒い

人とか向に合つてことばできただとう次オで、せわしい師走も大詰に入る。

角兵エ沢出合のベースまでは早調な用意がき。同度か休めながらも二時二十分ベース着。積雪は少なく五センチとなり。

伊那北で乗つたバスは高遅止り。乗り換えて戸台に着いたのが、もう昼に近い十一時二十分钟である。

菅野さんは昨夜から列車の中で飲んだウイスキーの酔がまださめず、足もとがフタついていて、ペースまで歩けるかなといそゝか心配であつた。帰りに伺いたところによると、戸台の河原の丸木橋もどうして渡つたのかわからなかつたそうだ。

昨日、今日と雪ひとつない快晴。快調にとばすが頂

までの遠いこと。十二時四十二分、やっと仙人の蛇

便に立つ。風が強く、やう

ゆっくりやしてあれ十卓々

に下山とする。雪量は多い

所で一ホンド。カーレルの底

にはそれで雪崩のチフリ

が横み重つていて、冬山で

あることを示している。

駒へ行つた途中はやう下

つているだろうと思ひ、わ

れわれも急いでベースに戻

つてみると、牧野君が一人

、器具袋の中を飯を作

っていた。われくても腰袋へ

つてしるので、牧野君が作

つてくれたミルクを飲んで

駒バーティが戻つてくるの

を待つ。

十二月二十九日 新宿にて合宿。坐席を確保するためとかで、菅野

今日はトレーニングといふことで計画もあり二班に

外が暗くなつた頃、人声

かして波音が戻つて来たことを知る。皆んなトレーニングにしては、口さゝか体にこたえたなどと書つて、

明日は吹雪くよろに積つてシヨラーフにもぐり込む。

一月一日

皆んなの腰いが天に通じたのか、外では雪が舞つている。「これで運動ねわりしながら口々に喰きながら、またシヨラーフにもぐり込んでいたら、八時頃雪もやんで、氣のせいか空も明るくなつて来たので、吾より熊穴沢と角兵エ沢の候察に行く。

角兵エ沢の方は中田・本次・黒田の三名、熊穴沢は奥園。今井の二人。角兵エ沢穴ともに二股手で登り引返す。どちらも雪崩の心配なしということで、明日復することに決定。

今日は山県さんが上つて来る日なので、迎えに行こうと用意をしていたら、テントの前にヒョウコリと東

われた。なにほともあれ、

これで迎えに行かなくとも済むと知って、内心喜んでいた。

一月二日

全員そろつて今日はオニ高卓まで登るべく出発。熊穴沢は昨日途中まで停車してあつたから配びくさけ

る。二股手でオニ尾根寄りを登る頃から、ラツセルが深くなつて来たので、

中ノ川越まで来ると、雪

は風にとはされ、露岩の上

さかねはならぬたり、ア

イゼンがル配で定が地に巻

かぬ。

甲州側に雪崩の出来そこないがあり、そこで穴を掘つて壁が見事で、なか／＼登高欲をそゝる。角兵エのコル

風穴から大ヤマソフルン

からの大オニ高矣の登りも雪崩の止る程の雪量はなく、

雪崩のタイムと同じ程度

の早さでオニ高矣の頂上に

着く。視界口いたつて悪く、長く居ても来いばかりで面白くもないでの飯を食つ

わられた。なにほともあれ、

これで迎えに行かなくとも済むと知って、内心喜んでいた。

一月三日

オ一高矣、オニ高卓同のヤマと吉田試で、今日下山する今井君だけを残して、

全員出発。角兵エ沢も熊穴

沢同様、二股でオーバーシューズ、オーバースホンを

身につける。この次は黒雲

明よりも積雪期の方がさき良い。坂野君は背の調子が悪いと口もきになくなつてしまふ。

風穴までの登りは、ノツベリした壁で登りにくいう程でもないが、あまり好きになれない所である。

横浦へ出て、黒雲同様、風穴へは甲州側をたどる。雪

のない時は珍らしくないが

一高矣の壁や、中尾根の側

壁が見事で、なか／＼登高欲をそゝる。角兵エのコル

風穴から大ヤマソフルン

からの大オニ高矣の登りも雪

崩の止る程の雪量はなく、

雪崩のタイムと同じ程度

の早さでオニ高矣の頂上に

着く。視界口いたつて悪く、長く居ても来いばかりで面白くもないでの飯を食つ

わられた。なにほともあれ、

これで迎えに行かなくとも済むと知って、内心喜んでいた。

一月四日

下山の日である。晴り内

に散歩を終え戸台へ急ぐ。

戸台でバスを得つ間、正月だからということで、店

に入つて甘酒をヒツカケる

。バスも朝早くから苦労し

た甲斐あつて全員座ることができた。

列車もまた辰野弁の臨時

列車で、二等代用の一等車

。下から別バーティが登つ

てすぐに下る。オニ高矣が

ラベースまで一時間で下つ

てしまつた。

一月五日

手に中央アルプス、後方に北アルプスの銀の屏風を連ねた様は、正に扛體である。小ヤマソフルへのスノーリ

ツジ回った日ほど寒いものではなく、常にやくことが出来た。小ヤマソフルの壁はあまりにも寒くてテ

が付けられぬため、大ヤマソフルを少しだけ下り、中

央波のタケカンバの林に入

り、オニ高矣まで登る。オ

直線距離にして五百木程の

一高矣からこゝまでわすか

ところを三時間もかゝつてしまつた。

ベースまでは昨日と同じ

熊穴沢を下降。途中、中ノ

川越のコルに立派なイグル

ーができていた。

12月30日

戸 畠	11.25
河 庫	11.40～11.50
エンタイ	12.47～13.05
角先エ沢出合	14.20

12月31日(仙大岳)

B.C発	6.10
丹沢山庄	6.40
北沢峰	8.05～8.50
仙穴一合目	9.20～9.30
。 四	10.06～10.15
。 六	10.58～11.07
小仙天	11.47～12.00
仙大岳	12.42～13.05
北沢峰	14.35～15.00
八丁坂水場	15.42～16.00
B.C着	16.30

1月1日(熊穴沢侵察)

白し先	12.15
熊穴沢入口	12.27
左俣出合	13.00
引返し奥	13.15～13.25
白し着	14.00

1月2日

B.C発	6.30
熊穴沢出合	6.42
左俣下	7.20～7.30
アイラン侵番	8.45～9.12
途中休憩	9.40～10.00
中ノ川越	10.40～11.00
オ2高桑	11.30～12.00
中ノ川越	12.15
熊穴沢出合	13.55
白し着	14.05

1月3日

B.C発	6.00
角先エのコル	9.05～9.15
オ1高桑	9.35～10.00
小ヤマツ	10.00～10.30
大ヤマツ	11.30～12.45
オ2高桑	13.05～13.40
熊穴沢出合	13.55
白し着	15.15

1月4日

B.C発	5.00
戸 口	7.00

品名	形状寸法	数量
幕営用具	冬用テント 夏用テント 張綱 ベタ スコップ 鉈 ノコギリ	ミート型(5.6人用)20 マナスル型(2.3人用)2 家型、寄奥、炊事用 縫製 6mm 木製 } 炊事用としても使用 25m 2 2 1
生活用具	キヤンドル タワシ マツナ	各天幕一張、本使用 大型 小型
行動用具	ナイフ ク アイスハーケン ロックハーケン カラビナ ロックハンマー ステナフ アフミ ツエルト キヤンドル 携持燃料 会旗(標識) テルモス	11mm 40m ナイロン 9mm 30m ク リンク付(長物) 携用8、収用7. 10 4 3 3段2、2段2 2 3 3 20 5
炊事用具	石油コンロ ラジース 石油 オイルタンク 大鍋 コッヘル 魔芋、マニタ オタマ、シャモジ 竹バシ、餅アミ 疋切り、タワシ フキン、雅布 手袋 フレンサー マツナ バケツ ベニヤマット	家庭用、丸型 マナスル、中型 マナスル 2L用 ポリエチレン 2 2 大型1、中型2. 各2 各2 各2 各1 各3 2 液体、中性 4 キヤンバス製、7L 4
その他	ラジオ 修理道具 救急薬品 寒暖計 予備キヤンドル	予備電池2付き 針、糸、ベンナ、小皮 1式 1 3

二子山南面——朝人のためのケレンテ室内——

（参考）二子山南面の構造



（参考）二子山南面の構造

豊野駅

板下はロード状の岩場とし、而して、雨天中の日、露地、日、雨、バタバタとよく、やはり少しもすじには二子山ではないだろうか。アスローラーとして、バスが走る坂崎まで進んでいたので、大師近くに止まつた。これからはもうと利用したい。

中央段
板はテラス一を構として、上部と下部に分けられる。下部はアスレコがひどく登りにくく、その対象にはならぬ。上部は高さ約80メートルの岩壁で、ルートは正面エイズ側に示される。事実上の登ほんの取付点では、オーバルを80メートルまで大きなバンドを伝わって達するが、板の末端からアスレコが多い難易がある。ルートは正面エイズ側に示される。事実上の登ほんの取付点では、オーバルを80メートルまで大きなバンドを伝わって達するが、板の末端からアスレコが多い難易がある。

（こゝにボルトがあるので、急のためにはラビアをかけると良い）
板はテラス一を構として、上部と下部に分けられる。下部はアスレコがひどく登りにくく、その対象にはならぬ。上部は高さ約80メートルの岩壁で、ルートは正面エイズ側に示される。事実上の登ほんの取付点では、オーバルを80メートルまで大きなバンドを伝わって達するが、板の末端からアスレコが多い難易がある。

（こゝにボルトがあるので、急のためにはラビアをかけると良い）
板はテラス一を構として、上部と下部に分けられる。下部はアスレコがひどく登りにくく、その対象にはならぬ。上部は高さ約80メートルの岩壁で、ルートは正面エイズ側に示される。事実上の登ほんの取付点では、オーバルを80メートルまで大きなバンドを伝わって達するが、板の末端からアスレコが多い難易がある。

（こゝにボルトがあるので、急のためにはラビアをかけると良い）
板はテラス一を構として、上部と下部に分けられる。下部はアスレコがひどく登りにくく、その対象にはならぬ。上部は高さ約80メートルの岩壁で、ルートは正面エイズ側に示される。事実上の登ほんの取付点では、オーバルを80メートルまで大きなバンドを伝わって達するが、板の末端からアスレコが多い難易がある。

（こゝにボルトがあるので、急のためにはラビアをかけると良い）
板はテラス一を構として、上部と下部に分けられる。下部はアスレコがひどく登りにくく、その対象にはならぬ。上部は高さ約80メートルの岩壁で、ルートは正面エイズ側に示される。事実上の登ほんの取付点では、オーバルを80メートルまで大きなバンドを伝わって達するが、板の末端からアスレコが多い難易がある。

に紹介する。

（参考）二子山南面の構造

オヨフェース

取り扱い不明瞭のため注意。

（参考）二子山南面の構造

（参考）二子山南面の構造

（参考）二子山南面の構造

ローソク岩

（参考）二子山南面の構造

（参考）二子山南面の構造

生と死の谷向——谷川岳町——

辻 勝 四 郎

西い山のノート

山といつ自然の中で。生きる、ことの不足と死のじなしを感嘆していた一時朝か夜にもある。それは、吾輩をかえれば自己回復への布求でもあつたろう。現在に口つてみれば、もはやそれも重い日の幼なじ可憐よのかも知れぬいか。



イトを演して、僕はしづくの向で、人々ホタルが散れて黒夜に映めた。そのホタルが道筋の草むらにハネを休めると、僕はそつと並寄つてみると、とうて所在が判らなくなるのが妙だった。

僕は広く、そしてわずかな匂配で下りになつてした。やがて道の両側に杉並木が現われてきた。「今夜は群入ヒュンテの幕営地に向時に辿りつく

る刃を尋ねて、このあたりから僕は昼夜行路をきめ込むことにした。杉並木が漆黒の闇を作つていて、わずかに明かり飛上の間隙に従つて行けば、ほんの一瞬工事には、誰から外れないといえ立寄つた時、元入院がともぞもの間違ひだった。ぼ中の彼にかゝつたように動けなくなつた。二百メートルを一気に走つた。

落した男が生きているはずがなかつた。てか死に果つた身体はすぐ頭の方に向つてある。そこで、僕はまくは覚えていない。ようやくガにかえつたときが、岩子タレの消連力のせいだ。岩子タレの消連力のせいだ。

岩子の黒々とした山の輪郭が、次第に仰く遠景として、やがて邊は田んぼの中をぐるぐるになり、あたりの風が静くなつた。その風の音を、これはまだ

突然、「ピィー」という鋭い列車の汽笛が、氣なるい度胸を吹き破つた。だが、それになつた。僕は再びよどんだ闇の中に引き戻されてしまった。

「あれ、角が曲っている」Mの声がする。つづけて僕はテントの外に出た。

笛吹川東沢→雁坂峠

清水 英男

40.9.11~12

単独



笛吹川東沢へ行く道を右に見送
9月11日
雁坂峠へ行く道を右に見送
2月、笛吹川左岸につけられ
た中庭の林道に入る。井道筋
にはススキが地を立て、落葉
樹は色づけ始めている。
右側通路のカラッとした
秋空をねりて来たが、意に
反して空はどんよりどくもり
天気は悪い。

左手を流れる笛吹川はその
高さと光輝し、樹間から清流
が眺められる。笛吹小屋にて
登山者カードに記入・挨拶を
済ませた後、2メギの茂る道に
歩き進める。

笛吹川左岸につけられた中庭の林道に入ると、笛吹川はその高さと光輝し、樹間から清流が眺められる。笛吹小屋にて登山者カードに記入・挨拶を済ませた後、2メギの茂る道に歩き進める。

笛吹川左岸につけられた中庭の林道に入ると、笛吹川はその高さと光輝し、樹間から清流が眺められる。笛吹小屋にて登山者カードに記入・挨拶を済ませた後、2メギの茂る道に歩き進める。

笛吹川左岸につけられた中庭の林道に入ると、笛吹川はその高さと光輝し、樹間から清流が眺められる。笛吹小屋にて登山者カードに記入・挨拶を済ませた後、2メギの茂る道に歩き進める。

笛吹川左岸につけられた中庭の林道に入ると、笛吹川はその高さと光輝し、樹間から清流が眺められる。笛吹小屋にて登山者カードに記入・挨拶を済ませた後、2メギの茂る道に歩き進める。

左岸を進むと、笛吹川はそのまま西へ進む。

笛吹川左岸につけられた中庭の林道に入ると、笛吹川はそのまま西へ進む。

笛吹川左岸につけられた中庭の林道に入ると、笛吹川はそのまま西へ進む。

笛吹川左岸につけられた中庭の林道に入ると、笛吹川はそのまま西へ進む。

笛吹川左岸につけられた中庭の林道に入ると、笛吹川はそのまま西へ進む。

笛吹川左岸につけられた中庭の林道に入ると、笛吹川はそのまま西へ進む。

笛吹川左岸につけられた中庭の林道に入ると、笛吹川はそのまま西へ進む。

昭和40年度 清和洋陵山岳会登山行一覧表

期日	場所	コース ルート	メンバーリスト
3.28~4.6	奥多伎	扇山～鳳の巣山～雲取山～丹波	本沢他3名
4.2~4	南アルプス	淀山吊尾根(リリハ本山)まで	山県単独
4.3	奥秩父	三峰口～蔵渕ヶ峰～天陽門	宮本単独
4.9~11	北アルプス	東尾根より鹿島槍北峰	奥園・中田・清水
4.10~11	西丹沢	黒沢・箱根塩沢	坂野・今井
4.11	奥高尾	和田峠～小仏峠	岡藤他6名
4.18	谷川岳	東尾根	奥園・本沢
4.19	武甲山	裏参道～西山稜	周藤単独
4.25	雨神山	三峰口～満湯～八丁～中津川	宮本他
4.29	谷川岳	白毛門山	山県他
5.1~4	谷川岳	東面合宿(悪天候故)△V字突破攻頂	辻・奥澤・坂野・清水
5.2~5	谷川岳	白毛門山(新人訓練) 土合～白毛門山～立ヶ岳～土合	菅野・山県・龜江・齊藤 中田・本沢・宮本・周藤 山崎定・石川
5.5	谷川岳	白毛門駆伐祭	辻・坂野・清水・佐々木・小柴他1名
5.16	高尾山	高尾山～紫岳山	本沢他
5.16	西丹沢	下棚沢	奥園・清水
5.16	八ヶ岳	初見山～八ヶ岳	齊藤他
5.8~10	西丹沢	本台～丹沢山～ユーノン	塚越他1名
5.21~24	北アルプス	豪丹山～天狗岳	本沢他3名
5.22~23	秩父	船倉～天目～白石～天陽寺(学徒大会)	山県他
5.23	三ッ峰	岩立リ、中央カント・未望大ハシツ	奥園・坂野
5.30	西丹沢	モミン沢	清水他
6.4	西丹沢	モミン沢・源次郎沢	本沢他1名
6.4~7	尾瀬	檜枝岐～羽ヶ岳～塘岳～長蔵小屋	本沢他
6.9	尾瀬	一ノ倉南枝(1/2野中矢塚テールリッジまで)	菅野・清水・中田・宮本他2名
6.6	谷川岳	橋筋小屋にてアルバイトの為入山	奥園・坂野・今井・原越
6.18	北アルプス	房戸岩中央カント・インパルルート	奥園
6.19	谷川岳	一ノ倉沢ヨルノビ	奥園・清水
6.13	谷川岳	朝霧沢・木葉川本谷	本沢他
6.19~20	西丹沢	初本～白糸山～十文字峠～川又	周藤・石川
6.20~21	奥秩父	越沢バソトレス・岩壁リトレー・ニンフ	清水・塚越
7.4	奥多伎	戸隠二回登廻	本沢他
7.10~19	戸隠山	セトの沢	清水・塚越
7.11	西丹沢	横走草山合宿(悪天候故)	辻・坂野・中田・佐々木
7.19~26	北アルプス	△△△ 清水、原越、今井、宮本、岡藤 石川、山崎、佐々木 北横石登頂	清水・塚越 本沢・周藤・石川・山崎定 山県他
7.29~8.6	阪神連峰 南紀山系 山脈	奈良～五条～高見山～明神岳～コクマタ ～大台ヶ原～大台ヶ原～夏葉～新宮	本沢他
8.1	谷川岳	一ノ倉沢サッテル取スルルンゼ	清水他
8.1~2	山梨	中ノ岳	宮本他
8.5~9	7月組合山	国体登山	山県他
8.8	谷川岳	一ノ倉沢4ルンゼ	中田・清水

8. 6～11	南アル岳	白峰三山北走	宮本他
8. 15	那須岳	茶臼岳～朝日岳～北温泉	局藤他
8. 15～18	奥多戸		塚越他1名
8. 26～29	飯豊連峰		菅野・清水
8. 29	茅ヶ岳	柳平～艺沢～茅ヶ岳～金ヶ岳～鞍替峠	宮本他
8. 28～29	八ヶ岳		宮本半次
8. 29～30	雲取山	鴨沢～雲取山～三峰(清流登山)	山県他
8. 31	北アル岳	ジマソタルム正面フェイス	龜江他
8.	北アル	燕岳～鳩ヶ岳～北穂高岳～涸沢	美園他1名
9. 1	北アル岳	ジマソタルムT1フランケ	美園他1名
9. 3	.	ジマソタルムT2フランケ	美園他
9. 3～5	.	北穂高溝合オーフル	本沢他
9. 4	富士山	ジマソタルム北壁	美園他1名
9. 5	北アル岳	吾妻山～劍山	本沢他
9. 10～13	益田山	笛吹川東沢～宇都信岳～直坂峠	清水半次
9. 11～12	奥秩父	穂高小屋アルバイト終りスロウ由下山	美園
9. 12	北アル岳	南面界中立山	辻・本沢・石川
9. 18	谷川岳	ニッゴー沢 タカノスA沢 B沢	奥園・宮本・周藤
9. 26	竜ヶ岳	高岳沢～竜ヶ岳山～地蔵峠	清水・中田・山崎
9. 30～10. 5	谷川岳	マカガヤ本谷・シンセン左岸・東南稜 一ノ倉カナルルルソルンゼ	周藤他2名
10. 3	御坂山塊	御坂峠～大石峠～川口沢	宮本・周藤
10. 3～5	北アル岳	屏风岩中穴カノチ・インゴルルート	奥園・灰野
10. 8～10	奥秩父	十文字峠(黒体豊山)	山県他
10. 16～18	北アル岳		本沢他
10. 16～17	上州武尊山	上の原～武尊山～アリンゴヤスキーコース	清水・周藤・佐々木
10. 17	両神山	大理草根(固体コース踏査)	山県・辻他
10. 23～24	上州武尊山	上の原～武尊山～川原草根～小庄温泉	美園・宮本
10. 24～25	奥秩父	大滝～鹿沼峠～安山峠～川又	石川半次
10. 31	岩殿山	岩豆～トレーニング	美園・清水・今井・塚越
11. 7	天狗山	浦和市民ハイキング	辻・美園・本沢・周藤
11. 7	両神山		清水他
11. 7	奥多戸	越沢ハントレス 岩登リトレーニング	塚越・今井
11. 14	表門沢	助七の沢	宮本他
11. 22	武甲山	下の丸山～銚子沢山合～下の丸山	石川半次
11. 13～14	ハケ岳	広瀬原沢オルソルンゼ	奥園・本沢
11. 20～21	表門沢	深沢付次～モミゾ沢下降	山県他
11. 21	.	仁王～天石尾	本沢他1名
11. 21～22	北アル岳	大河原根後安	奥園半次
11. 23	富士山	西上山横 寒川行 寺圓・中田・清水・本沢	今井・周藤・山崎・佐々木
12. 5	奥アル	17.上往復 川端行～刃山	菅野・山県・保原・奥園
12. 5	.	二日山～水沢	清水・中田・本沢・塚越
			本沢他
			辻・奥園

12.19	谷川岳	西高尾根へ天神尾根下降	清水单体
12.22	三ッ峠	岩登リトレーニング クロワールへゴンベーナムニー	奥園・清水
12.31~1.3	上州武尊山	中央壁メルート・中央カント 冬山合宿 上の原～武尊山～オリソビアスキー場	菅野・山県・藤原・奥園 中田・清水・本沢・岡藤 佐々木・山崎定・淀穂
12.31~1.1	雁坂峠	玄渓～雁坂峠～川又	石川他1名
1.15	燕君山	白久～燕君山～貳州日野	石川单体
1.23	奥多伎	孤穴バットレス 岩登リトレーニング	塙部单体
1.29～30	吾妻山	野地～高山～土鳴	山県他
1.30	表丹沢	水鳥川平谷	奥園・岡藤
1.30	市倉山	白久～熊倉～貳州日野	石川他3名
1.	武甲山	豆湖沢	石川单体
2.5～6	八ヶ岳	玄月原次奥壁オルソ	奥園・中田
2.15～20	富士山	精王岳連横雪期登山指導者講習会	菅野・山県・奥園・中田 塙部・本沢・淀穂他
2.21～23	西丹沢	モネコシ沢	塙部他1名
2.27	三ノ峠	コモリ沢	牧野・今井・佐々木
2.29	谷川岳	万太郎尾根 升戸小屋次の傾斜まで	奥園单体
3.6	八ヶ岳	阿弥陀岳南稜	奥園・清水
3.7	武甲山	豆湖沢	石川单体
3.12～13	谷川岳	精王岳連 万太郎尾根雪洞講習会	山県・菅野・岡藤
3.13	。	東尾根	奥園・中田・清水
3.20～21	八ヶ岳	黒天の為、南稜パーティ以外は避けた 南稜～菅野・中田・今井・塙部	菅野・奥園・牧野・中田 清水・今井・塙部・石川 岡藤・山崎・淀穂・榎本

昭和40年度 会計報告

(担当 古野重雄)

収入の部	支出の部
前年度残余金	3,790
前年未納会費(27ヶ月)	4,050
今年度会費(19ヶ月)	29,550
マーク代(150円×7枚)	1,050
入会金(200円×5枚)	1,000
白毛門隊探索費(500円×18枚)	9,000
元年会費(400円×15枚)	6,000
旅館料(1人)	7,700
第付金(東山合宿料金)	3,154
計	65,294
※残高(41年度探索) 23,923円	
※未納会費(4ヶ月分) 6,150円	
入会金 200円	
	会場費(300円×25回) 7,500
	探索等立替払い 7,386
	東京呑酒入費 3,000
	会場費(コハル、三ツ五郎等) 7,295
	会員証作成代金 1,920
	新人募集広告代 2,000
	旅費(ハガキ350枚) 1,750
	忘年会費 7,095
	慶弔費(山県氏) 1,000
	市岱連会費 1,000
	その他(雜費)
	富士講習会申込金 100
	浦市高山岳部立替(鋸) 295
	佐々木文通費 500
	小屋代(牧野) 580
	計 41,371



後記

春からこつづき、冬にもむかひが
華々しい。

「谷川岳」では、一ノ倉沢工事

シ奥壁中央刃カント、同波形ナムニ

1・同凹状岩壁、中央稜コシス
正面、幽ノ次中央壁、V字奥壁

同右殿等々。

夏の標高合宿は、運動三日向好
天にめぐまれて、渾石クラック尾
根(2バーティ)、オーニ根、(1)

フランケタイレクトルート・同芝

工大ルート、タレボン古川ルート

、屏風岩オーレンジ、同中央刃

テ(2バーティ)、同東壁面積ル

ート、奥又白竹村、北系ルート:

等々と言った豪麗だ。

岩登りは、たしかに山登りの花

形だ。アルピニズムの真髓として

、それはアルプスにも、そしてヒ

マラヤにもつながる。

だが、いまさら達羅万能要領を

引合いに出すまでもなく、各人が

自覚をもつて行動しよう。

とかく陥りがちな、慢心と小児

病的な傾向を戒める。

日本男子のバイタリティか。

○

——渾谷偶見——

がそこがことしたせの中、それだけに、人の心は尊いと誇示する。圓体豆山に其判の向ともあらず藝術に寄せる心、勿論、山登りにもせんや要素がある。遊びとして

が、こゝらでうつとは協力モテバなるまい。

○

がこととしたせの中、それだけに、人の心は尊いと誇示する。圓体豆山に其判の向ともあらず藝術に寄せる心、勿論、山登りにもせんや要素がある。遊びとして

が、こゝらでうつとは協力モテバなるまい。

33歳のこの夏、僕は屏風岩中央刃コンティラツシユの小さなテラスに横になつて、ツエルトに寝れる蕪波れの月の丸太眺めていた。これがながら屏風岩で過す最後の夜にならうたろ? ——とほんのちよつてぶりが偽を極めながら。

○

「国体に莫大な費用を抜きよりも福祉施設を」—てんな陳情が先般もあつたと聞く。後進県埼玉の国体開催の是非はさうノゾだが、ドッコイ、来年にひかえた生産園係者にとつて口は他人ごとではない

編集とは名ばかり。集まつた原稿をバタバタと並べるだけと吉うわけで今号もあまり出来は良くない、執筆者の固定化が殊に目立つ。毎度ながら遅刊を誂びる。(計)

(377)

第17号 漢語 沢山
発行日 昭和四十一年八月二十九日
発行所 浦和漢語山岳会

浦和市篠塚一五四六 山県島彌万
発行責任者 会長 菅野 達也
編集・筆耕 友 勝四郎